戦姫絶唱シンフォギアW

まだお

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この街ではある噂が流れている。

ノイズに囲まれて絶対絶命となったその時、どこからともなくマフラーをたなびかせたヒーローが現れると…

目次

Wの探偵／少女の覚醒 ―― 1
Wの探偵／街に這い寄る影 ―― 24
Wの探偵／熱い一撃 ―― 45
Cの捜索／覚悟の意味 ―― 76
Cの捜索／新米探偵（仮） ―― 98

Wの探偵／少女の覚醒

某国某所のビル内。

片足を引きずりながら歩いてきた白いスーツにの男が、結晶のようなものに包まれた少女へと手を伸ばした。

それに応えるように、少女が手を伸ばし返すと彼女を包んでいた結晶状のものが割れる。

すると宙を浮いていた少女の体は、ゆっくりと地面に落ちていった。

スーツの男は軋む体に鞭を打ち、少女を抱えると急ぎ足でその場を離れる。

途中、若い男子が駆け寄ってきて「代わりにます」と白スーツの男師匠に伝えると、少女を受け取って抱え直す。

3人は出口へと向かうが1人は少女を抱え、1人は負傷しているためかその歩みは遅い。

そんな3人を追いかけるように複数の男たちが銃を構えながらやってきた。

男達は照準を定め、その引き金を引く。

「おやっさぁぁぁぁん!!」

男たちから放たれた凶弾によって倒れる白い師スーツの匠男。
若い男は慌てて駆け寄るが、倒れた男からは血がとめどなく流れており、白いスーツが赤くて染めてしまっている。
おやっさんと呼ばれた男は、最後の力を振り絞るように自分の帽子を弟子へと被せた。

「あの子を…頼む」

師匠の手が力尽きるように落ちるのと、ほぼ同時にビルが揺れる。
振動の原因は、下層のフロアから床を突き破って現れた『怪物』。
それが放つ光弾は三人のすぐ近くへと被弾し、大穴を開けた。
怪物のあけた穴の中へと落ちていく自らの師。
それを弟子は呆然と眺めていたが、やがて奥歯を噛み締め立ち上がると少女を再び抱え直し、近くにあった階段の陰に隠れる。

男は息を切らせながら頭を抱え込む。
自分の師から受け継ぐ最初で最後の仕事、この少女だけは何があっても守らなければならない。
それが彼らの探偵の流儀なのだから。
しかし、このままでは逃げきることができずに再び捕まってしまうのは明白だった。
脳内をトップギアにして考え込む男に、少女はアタッシュケースを突き出す。
「悪魔と相乗りする勇気…あります?」
「…え?」
半泣きだった男は半ばやけくそになりながらもケース悪魔の中身手を掴んだ。
その時から運命の歯車は動き出した。

この日が彼らにとってのビギンズナイト。
1人の探偵がその命を燃やし、新たに2人で1人の探偵仮面ライダーが生まれた日。

◊

青年と少女、二人乗りをしていたバイクがとある民家の前で停止した。
「どうしたんですか翔太郎さん？トイレですか？」
「違ぇよ！見ろ、セレナ。この家酷い嫌がらせ受けてるみてーだ」
バイクから降りてきた２人はその惨状に顔をしかめる。
「たしかに…表札には立花と書いてありますね」
「張り紙の内容からするならよっぽど恨み買ってんだろうが…」
少女（セレナ）が表札を見て、青年（翔太郎）が家の一帯に貼られている紙を手に取った。
そこには住民を貶し、弾劾するような言葉が書かれている。
それも１枚ではなく家の至る所に貼り付けてあるのだ、尋常な事ではない。
翔太郎は顎に手を当て少しばかり考え込んだ後、突如、両手を叩く。
「思い出した！そういや俺がこの街を離れてる間にノイズによるでっかい災害があったのをウォッチャマンから聞いてたぜ」
「でもそれが関係あるんですか？」
「俺が知ってる限り、この街でこんなことをされるような悪人はいねぇ。だとしたらこ

こ最近で何か起きたと考えるのが妥当だろ」
「なるほど。まぁ私は最近この街に来たので、そのあたりの事情は翔太郎さんの方が詳しいでしょうね」
「セレナ、検索だ。キーワードは…ツヴァイウィングのライブ、ノイズ、そして『立花』」
「はい、すこーし待ってくださいね」
セレナは目を瞑って両手を広げる。
一見するとただ瞑想をしているようにも見えるが、現在、彼女の意識はこの地球に刻まれた全ての記憶を保管する『地球の本棚』と呼ばれる場所につながっていた。
『地球の本棚』、それは文字通り白地の世界に無数の本棚が点在する場所。
常人では決して入る事の出来ない特別な空間、ここに入る事ができるのはこの世でセレナただ1人。
そこでセレナは、先程のキーワードを元に立花家に起きた事件を調べる。
そうして暫くしたところ、彼女は再び目を開いた。
「今回の件についての全てを閲覧しました。分かりやすいように説明しますね」
セレナの話す事件の内容、ツヴァイウィングのライブ会場にて起きたノイズによる惨劇。
この事件では1万人を超える死者と行方不明者がでている。

これだけでも類をみない悲劇であったのだが、現実は更に非情であった。
週刊誌により死者及び行方不明者の内、ノイズによる被災が3分の1であり、残りは避難の際に将棋倒しなったことによる圧死、逃走経路確保の為の傷害致死が原因であることが判明したのだ。
これを受けた一部から非難の声があがり、やがてそれは生き残った人々へと向けられ大きなうねりとなる。
それはただ『生き残った』という事実だけで生存者へと向けられ、その人々を追い詰めていった。
「この家の子は被災者の中でもかなり悲惨ですね。学校ではつま弾きにされて、父親はこの件が原因で家を出ていったみたいですし」
「…そりゃあ憤る奴らの気持ちが分からないわけじゃねーけど、それでもこの子に罪があったなんて俺は思えねぇ」
翔太郎は拳を強く握りしめた。
彼にも大切な人を失ったやり場のない怒りは理解できる、だがそれがなんの罪もない子供を苦しめるのは納得できない。
それを見たセレナは不思議そうに首をかしげる。
「なんで翔太郎さんが怒ってるんですか?」

翔太郎は無感情に放たれたその言葉に、一瞬激昂しかけるがセレナの表情を見て思いとどまった。

彼女の顔には含まれるものは一切ない、ただ単純に人の為に怒るということが分からないのだ。

帽子を深くかぶり直し、ため息をひとつ吐く。

「いいか、セレナ。俺は怒ってるんじゃねぇ、悔しいんだよ。この街では誰一人として泣いててほしくない、だから、誰かが泣いてんのならそれを拭いに行く」

翔太郎の言葉を受けてもセレナの反応は薄い。

口元に手を当てて言葉の意味を考えているようだが、理解はできていないようにみえる。

「うぅん…難しいです。地球の本棚でも人の心は検索できませんから…でも、私、翔太郎さんがこの後何をするのか気になってきました！」

セレナは先程とはうって変わって、瞳を輝かせた。

彼女は良くも悪くも純粋であり、みずからが興味を持った事に関しては、異常なまでの拘りをみせる。

「なら特等席で見せてやるよ。この街は俺にとって庭みてぇなもんだ。悪評の一つや二つ簡単に覆してやる」

翔太郎は、そう言うとヘルメットをセレナに投げ渡し、バイクに跨るように促す。
自身もヘルメットをつけて、バイクのエンジンをかけたところで立花家を振り返った。
「そう言う事だからよぉ、もう少しだけ待っててくれ嬢ちゃん。安心しろ、あんたの涙は必ず俺が止めてやる」
「一人で何言ってるんですか翔太郎さん？先に病院行きます？」
「うっせぇ！誰が頭の病気だ！いいから振り落とされねぇようにしっかり掴まってろ」
勢いよく発進したバイク。
それを見送る視線がひとつだけあった。
翔太郎の最後の言葉、それが彼女に気づいていたから、なのかは分からない。
ただ、たしかにその言葉は少女の胸に届いていた。

◊

Wの探偵／少女の覚醒

◊

俺の名前は左翔太郎。
極めてハードボイルドな私立探偵だ。
朝日が覗き込む窓をに向けて欠伸をひとつ。
探偵てのは常に寝不足だ。
何故って？
探偵てのは脳が常に謎を求めて、休ませちゃくれないからさ。
そんな眠れぬ夜を過ごした朝は、トマトをかじり脳に栄養を与える。
ハードボイルドな男にチャラついた飯は似合わない、飯なんざ丸かじりで十分だ。
そして欠かせないのが締めのコーヒー。
こいつが俺の脳細胞に喝を入れてトップギアにしてくれる。
後は依頼人を待つだけだが…どうやらその必要もなさそうだ。
下から駆け上がってくる足音、今日もまたこの街で涙を流す奴が俺に救いを求めて来たようだぜ…

「翔太郎さ～ん！セレナちゃん！風鳴翼さんの新曲が近いうちに出るの知ってる？」
「もう！響ったら！そんなに走ったら下の人に迷惑でしょ？あ、翔太郎さんおはようございます。…また朝はトマトだけなんですか？」
「ぶっ!?お前らかよ…ウチは女子高生の溜まり場じゃねぇんだぞ！帰りやがれ！」

◇

『鳴海探偵事務所』。
その中の来客用の椅子に茶髪の少女と黒髪の少女は座っていた。
「たくっ、お前らそれ飲んだら帰れよな。只でさえ寝不足だってのにお前らに付き合う気力はねぇ」
そんな2人の前にコーヒーを持ってくる翔太郎。
一見彼女らのことを邪険に扱ってるようだったが、しっかりと彼女達用のコーヒーカップがある当たり、本気で嫌がってるわけではないようだ。
彼もそのまま2人の反対側に腰を下ろすと自分の分のコーヒーを一口飲む。

「寝不足って…また左平次シリーズ見てたんですか？いや～そこまで気に入ってもらえると勧めた側としても嬉しいです」

部屋を見渡した後、照れたように笑う茶髪の少女。（立花響）

翔太郎が先程まで座っていた机には、左平次シリーズと書かれたＤＶＤにプレイヤーまで置いてある。

昨夜何をしていたのかは考えるまでもなかった。

「朝からごめんなさい翔太郎さん。響がどうしてもって聞かなくて…でも、いくらお金がないからって朝トマトしか食べないのは体に悪いですよ？」

そう言った黒髪の少女（小日向未来）の目は生ゴミと書かれた袋に向けられている。

その中身は大量のトマトのヘタ。

それはここ最近の事務所での食生活を物語っていた。

翔太郎は口元をヒクつかせながら未来へと弁明を始める。

「いいか、ヒナ。ひとつ言っとくがあのトマトは俺だって好きで買ったわけじゃない、元々は検索にハマったセレナのやつ「あっ、セレナちゃんだおはよー！」ビッキー…まだ俺が話してんだろお！」

会話を遮った響に抗議するも、言われた本人は気にすることもなくベッドから起き上がってきたセレナへと駆け寄った。

セレナは寝ぼけ眼を擦りながら、近寄ってくる響へ「おはようございます」と挨拶をする。
「見てみて！これ、翼さんのＣＤがまた新しく発売されるんだよ！しかも特典がこんなに豪華なの！」
「うわぁ！凄い！これファンなら予約しといて損は無いですよ！私も欲しいくらいです」
「えへへ、そう言うと思って～、なんとセレナちゃんの分も予約してあるんだ」
「本当ですか!?ありがとうございます！」
翔太郎は事務所内が一瞬にして、騒々しくなってしまった事に項垂れた。
左翔太郎、彼がハードボイルドに至る道のりはまだまだ遠い。
そんな彼をみて未来は苦笑する。
「あはは…翔太郎さん、いつもすみません。響ったらここが凄いお気に入りみたいで、一応これでもお仕事の邪魔になるからって止めてはいるんですけど、週に3回は顔を出さないと禁断症状が…」
「あいつはウチの事務所でやべーもんでもキメてんのか…。まぁ、俺としてもセレナの面倒みてくれる分には助かってんだがなぁ」
聞く人が聞けばまるで保護者のような会話だ。

そんな、渦中の２人はまるで気にした様子はない。
趣味を同じくする友人、というのがいいのだろうか。
相も変わらず今度発売されるＣＤの話題で盛り上がっている。
「問題はこの事務所が段々とファンシーなもんに侵略され始めてることだ。見ろ、いつのまにか事務所の右側半分には、女子高生歌手だかアイドルだか知らねぇがそのグッズがズラっと並んでやがる」
未来は、改めて事務所内を見渡した後、思わず笑ってしまう。
初めてここに来た時は、いかにも男の仕事部屋といった雰囲気があったが、今では見事に半分だ。
左半分は変わらずにレトロな雰囲気が残っているが、右半分はセレナと響の手によって年頃の女の子が好みそうな、ＣＤや特典のポスターなどが貼ってある。
彼女はふと、この事務所に初めて来た日を思い出した。

◊

あの日、自分の親友がお世話になった人にお礼を言いたいから、ついて来てくれと頼んできた時。

私達が事務所を訪ねると中にいたのは、自分達より少し年上の男の人と、同じ歳くらいに見える女の子。
「こ、こんにちわ！じ、実はわたわた私、この前、この事務所にお世話になった者でして！」
響ってば事務所に入るまでは、お礼を言うんだって張り切ってたのに、中に入った途端に緊張しちゃってるじゃない…
もう、だからお手紙にでもした方がって言ったのに。
「突然訪ねてしまってごめんなさい。私はこの子、立花響の友達で小日向未来と言います。実は、少し前に響がこの事務所の人に助けてもらったからお礼を言いたいそうでして」
「ちょっ、ちょっと未来！私が言うっていったじゃん！」
「響に任せてたらいつまでも経っても終わらないでしょ？お仕事の邪魔になるしお菓子渡して早く帰るよ」
探偵の仕事がどんなことをするのかはわからないけど、アポも無しに来られるのは困ると思う。
その証拠に女の子は、一度も私達を見ることなく本を読み続けている。
響はまだ、私に抗議したそうだったけど、お仕事の邪魔になるって言ったのが効いた

みたいで、素直に男の人に菓子折りを手渡した。
「あ、あの！…本当にありがとうございました！」
響は色々と言いたかった言葉を飲み込むようにしてお礼を言う。
事前にお願いしてれば、もう少しくらい時間が貰えただろうか。
肩を落とす幼馴染をみるとなんだか私まで悲しくなってくる。
「まぁ、待てよ女子中学生。せっかく礼に来てくれたってのにもてなしもせずに帰したんじゃあ、男が廃る。コーヒーの一杯でも飲んで行きな」
そんな私達を見かねたのか、男の人が引き留めてくれる。
今まで帽子で隠れてて、その表情は分からなかったんだけど、私達を見つめるその目は優しく見えた。

あの時に比べると響もセレナも随分と変わったと思う。
響ももう事務所に来ても緊張する事はないし、セレナも随分と優しくなった…うぅん…優しいというのも違う、のかな？
とにかく昔みたいに本ばかり読んでいることもなくなった。
唯一変わらないのは目の前にいるこの人だけだ。
２年前から変わらずにずっと優しい人。

◇

昔を思い返していた未来は、ふと、思い出したかのように話題をふった。
「そう言えば翔太郎さん。仮面ライダーて知ってますか?最近、響が気にしてるみたいで」
「…あぁ、この街の都市伝説だな。所詮噂は噂だが、本当にいるなら最高にハードボイルドな奴らだと思うぜ」
「…この写真、仮面ライダーに助けられた人が偶然写真で撮ったらしいんですけど、ちょっと翔太郎さんのバイクに似てませんか?」
そう言って翔太郎の前に携帯を突きつける。
そこには、ぼやけてハッキリとは写っていないが、辛うじて前半部分が黒色であり後半部分が緑色であることが分かる写真が載っていた。
それは翔太郎が移動手段に使うバイクによく似ている。
「ぶっ!!げほっ、げほっ…い、いや、よくあるタイプのバイクだからな。硬派な男の趣味は似通うもんだぜ」
怪しい、それが未来の抱いた率直な感想だった。

昔からそうだが目の前の２人組みは何かを隠している。
そもそもこの２人の組み合わせ自体、不思議なのだ。
響は特に疑問に思っていないが、普通、自分達と年の変わらなそう少女が学校にも行かず、探偵という仕事をするだろうか。
出会ってからかれこれ２年ほど経過しているが、未だに詳しくは教えてもらっていない。
聞いても何だかんだとはぐらかされてしまう。
それが未来の心に影を落としていた。
おそらく、そうそう人には言えない事情があるのだと察してはいる。
友人というには翔太郎の方は少しばかり歳が離れている気もするが、２人は大切な人かと聞かれたら自分は頷くだろう。
少なくとも自分はそう思っている。
だからこそ、翔太郎もセレナも自分達の事を思って何も言わないのは分かってはいた、分かってはいるのだが…
それでも、何を抱えているのか教えて欲しかった。
でなければ自分は響（親友）を助けてもらった恩を返すことも…
（心配をすることさえもさせてもらえない…）

「おい、おいヒナ！どうした？ぼっーとして…つーかお前顔色悪いぞ。体調悪りぃなら帰って休め」
「…ごめんなさい。少し遅くまで勉強し過ぎたみたいです」
「ほー、聞いたかビッキー。ちっとはヒナを見習え」
「聞～い～て～ま～せ～ん」
今はまだ我慢しよう。
きっといつか話してくれるはずだから。

◊

私がこの事務所に来てから約２年が経ちました。
昔の事、翔太郎さんとそのお師匠さんに助けられる前の事はあまり覚えていません。
時々、自分が本当はどこの誰なのか、それを考えることはありますが結局いつも答え

は出ないんです。

でも、それが思うほど辛くないのは翔太郎さんや響さん、未来さんがいるこの日々が楽しいから、なんでしょうね。

「やっとアイツら帰りやがったか…おい、セレナ！ＣＤ代はお前のお小遣いから天引くからな」

左翔太郎。

私を連れ出した方のお弟子さん。

本人はハードボイルドを目指しているそうですが、全然茹で上がってません、むしろ半熟（ハーフボイルド）です。

この前も私が、検索にのめり込んでしまって大量のトマトを買い込んでしまったのに、文句を言いながら自分がトマトを食べて、私にはちゃんと栄養のある物を食べさせようとしてました。

多分、本当にハードボイルドな人だったら、私が何をしても自己責任で片付けてしまうと思います。

だいたいいつもそんな感じで、私が何か失敗してしまっても嫌々言いながらも助けてくれるんです。

私はそんな翔太郎さんについつい甘えちゃって、よく「セレナぁ！」て怒られるんで

すけど、それが何だか本で読むような家族みたいで、嬉しくって…
ゆで卵はかた茹でよりも半熟の方が好きな私としては、今のままでいてほしいのですが、翔太郎さんはハーフボイルドな方それを言うと怒られちゃうから内緒ですよ？
「待ってください。ハードボイルド小説が経費で落ちるのに私のＣＤが自腹なのは納得がいきません！」
「ハードな大人には必要なもんなんだよ」
「訳がわかりません…」

◊

響と未来が事務所を訪れてから数日後。
本日は風鳴翼のＣＤ発売日である。
セレナは椅子に座り響が来るのを今か今かと待ち構えており、翔太郎は左平次シリーズ劇場版のＤＶＤを観ていた。
そんないつもの日常はある警報によって崩れる。

「聞いたか、セレナ」
「はい、ノイズですね！翔太郎さんはご準備を、私はすぐに居場所の検索に入って場所を特定します」
「あぁ、任せたぜ相棒」
ノイズ襲来それを知らせる警報が鳴り響く。
ノイズは災害として扱われている。
それは大自然と同じで、人間の力では抗うことができないからだった。
ただ自然と違うのはノイズは人を狙って襲ってくること、だから人々はシェルターなどにこもることによって身を守るのだ。
しかし、この２人はむしろそれに抗うように行動する。
翔太郎は掛けてあった帽子を掴むと扉をあけて外へ駆けて行き、セレナを目を瞑り、意識を『地球の本棚』へと飛ばす。
街を泣かせるモノがいるのならば、それを放って置くことなどできない。
何故ならばこの２人は－

◇

街の中で悲鳴が響き渡っていた。
ノイズに逃げ惑う人々。
それは他者を助けようとする者もいれば、救助を待つ者、我先に逃げ出す者、諦める者と様々だ。
だが、1つ言えるのはその人達、皆がこのまま死にたくはない、誰か助けてくれと心の中で涙を流している。
だから、彼らは現れた。

この街で涙を流す者がいるならば、それを拭いに行こう。

「行きましょう、翔太郎さん」／「行くぜ、セレナ」
街中と事務所内、それぞれ別々の場所にいるが、2人の意識はそれぞれの腰につけられたベルト（ダブルドライバー）で繋がっていた。
2人はUSB状のメモリ（ガイアメモリ）を懐から取り出しスイッチを押す。
『サイクロン』／『ジョーカー』
そこから流れる低音の声（ガイアウィスパー）。

「「変身」」

セレナが先にそれをダブルドライバーの右側のスロットへと装填すると、メモリは翔太郎の元へと送られた。

翔太郎は転送されたメモリを再度押し込み、今度は自身が持つメモリを左側のスロットに装填する。

『サイクロン』／『ジョーカー』

風の記憶と切り札の記憶。

地球に刻まれていた２つの記憶はセレナの意識を伴って、翔太郎の身を超人へと変えた。

緑と黒の半身を持ち、風にマフラーをたなびかせる。

その姿を見た誰かがポツリと呟いた。

「仮面…ライダー…」

それは涙を拭うための二色のハンカチ。

この街で涙を流す人々が名付けた希望の名であり、絶望に対する切り札。

そう、彼らは決して街を泣かせるモノを許さない。

Wの探偵／街に這い寄る影

◊

わたしは、女の子を抱えて街中を走って逃げる。

どうしてこうなっちゃったんだろう…

本当なら今頃、セレナちゃんや翔太郎さんと新作のＣＤを聴いて盛り上がってる予定だったのに。

走り過ぎて息が苦しくなったわたしは、立ち止まって呼吸を整えると少し前のことを思い出していた。

◊

日の暮れた教室で２人の少女が机に座っている。

黒髪の少女は机に置かれた紙に何かを書き込んでおり、もう１人の茶髪の少女は携帯をじっと眺めていた。

「響、さっきからずっと携帯を見てニコニコしてるけど、何か面白いことでもあったの？」

「うん、これ見て未来。また仮面ライダーの目撃情報が載ってるよ！」
そう言って茶髪の少女立花響は黒髪の少女小日向未来に携帯の画面を見せる。
そこには『都市伝説仮面ライダーはやはり実在していた!?』と書かれたサイトが載っていた。
「…仮面ライダー、前にも話してた都市伝説ね。もう！子供じゃないんだからそんな記事ばっかり見てないで少しは勉強したら？」
「そんなぁ酷いよ未来…翔太郎さんからもこの前、同じような事言われたのにぃ～」
わざとらしく項垂れてみせる響。
未来はそれを見て呆れ半分微笑ましさ半分の笑顔をうかべる。
仮面ライダーについては彼女自身思うところはあるが、待つと決めた以上響が下手に関わって危ない目にあうのは嫌だった。
だから、それとなく響の興味が他にうつるように誘導する。
「だいたい、今日は仮面ライダーよりも大切な事があるでしょ？風鳴翼さんに憧れてリディアンを選ぶくらいなんだし」
「えへへ～、それはそうなんだけどね！でも本当に面白いんだよ仮面ライダーの記事。体の半分が別々の色をしてて、パンチでノイズをドッカーンて爆発させたーとか、体が半分こになって手足がぐにゃーんて伸びたーとか」

「人がノイズをやっつけたり、半分こになったりなんて出来るわけないじゃない。それより響、時間はいいの？」
「え？…うわわ！もうこんな時間!?早く受け取りに行かなきゃ」
携帯の時間を確認すると、慌ててポケットに直して荷物を鞄へと詰め込む。
今日は、以前から響が楽しみにしていた風鳴翼のＣＤの発売日だ。
「やっぱり、響ったらうっかりしてるんだから…私は先生にこれを提出しないといけないから先に帰ってていいよ」
「ほんと？ありがとう、未来！じゃあ後で翔太郎さんの事務所に集合だね！」
響は悪戯っ子のように笑う。
仲が良いとはいえ男性の仕事場に押しかける事を勝手に決めてしまっているが、彼女のブレーキとなる未来もこの件に関しては止められなかった。
それは未来自身も事務所で過ごす時間が好きだったからだろう。
「それでもいいけど、またいつもの人助けで遅れないでね？」
「大丈夫だよ！セレナちゃんも待ってるだろうしすぐに戻ってくるから」

◊

ほんの数十分前までいつもと変わらない日常を送っていたはずだというのに、今では随分と前のことに感じてしまう。

だが、泣き言ばかりも言ってられない。

響の背にはまだ自身よりも随分と幼い子供が乗っているのだから。

自分で自分を鼓舞しながら街の中を駆け巡る。

そうする内に彼女が幼女を抱えて走った距離はかなりのものになっていた。

それでも突破口（シェルター）は見えてこない。

まるで終わりの見えないマラソンについに響は限界を迎え、足をもつれさせて転んでしまう。

「はぁっ、はぁっ…」

息を切らせながら横たわる響の脳内にある日の記憶が蘇る。

それは彼女にとっての運命の始まり、1人の少女がその命を持って、響に伝えたもの

『生きること諦めるな！』

それは彼女にとっての特異点（ターニングポイント）、2人で1人の探偵が体現したもの

『俺はこの街で誰も泣いててほしかねぇ』

今の少女を作り上げた原点。

歯をくいしばると再び立ち上がって、幼女を抱えた。
響の目に諦めはない、彼女は自分のゴールを絶望などと認めていない。

◊

一方、事務所を出た翔太郎達は大量に群がるノイズと正面から対峙している。
最もその出で立ちは常人のものではない。
緑と黒の半身、首元からたなびくマフラー。
それは都市伝説とされている仮面ライダーと一致するものだった。
『さぁ、お前の罪を数えろ』
ノイズの集団を指差しその罪を問う。
無論、ノイズからの反応はないがそれを気にすることはない。
奴らに意識があろうがなかろうが、この街に住む者を泣かせるのであれば彼らが取る行動は1つ。
「おらっ」
翔太郎（仮面ライダーW）はノイズへと駆けると、そのまま飛び蹴りをかます。
強烈な一撃を受けたノイズはなすすべもなく消滅した。

その勢いのまま仮面ライダーは、周囲のノイズへと続け様にキックの連撃を繰り出していく。

次々と撃破されていくノイズ、しかしその数は未だ膨大。

このまま相手どっても負けることは無いだろうが、かなりの時間がかかってしまうだろう。

「相変わらず数だけは一丁前のやつらだ」

翔太郎（左半分）のぼやきに反応するように、仮面ライダーの右目が光るとセレナ（右半分）が答える。

『ノイズがこれだけとは限りません。逃げ遅れた方がいらっしゃるかもしれませんし、早目に切り上げたいところですね』

彼らが言うように仮面ライダーにとってノイズ一体、一体はそれ程の脅威では無い。

だが、常人からすればノイズとは逃れることの出来ない絶望なのだ。

万が一を考えればあまり悠長にすることもできなかった。

「だったら、ハードボイルドに決めてやるよ。合わせろセレナ」

そう言うと腰のベルト（ダブルドライバー）に挿さっていた黒いＵＳＢ（ジョーカーメモリ）を引き抜き腰の横（マキシマムスロット）に付いている穴に装填する。

『ジョーカー、マキシマムドライブ』

《マキシマムドライブ》それは、メモリの持つ力を極限まで高めることにより放たれる必

殺の一撃。
今回、仮面ライダーが選んだのは風と切り札の技。
突風が彼らを中心に吹き始めると周囲のノイズを巻き込み、より大きな渦となっていく。
その勢いが最高潮に達した瞬間、仮面ライダーは文字通り右と左に半分ずつ割れて蹴りを放つ。
「『ジョーカーエクストリーム』」
必殺の一撃を受けたノイズの群れは爆散し大きな煙をあげた。
やがて、それが晴れるとそこにはかつてノイズであった塊が残るのみ。
「うし、次だ」
そう言って歩き出そうとした仮面ライダーの耳に歌が聞こえてくる。
思わず振り返った彼らの目に、人の背から伸びるナニかが映った。
「な、なんじゃありぁあ!?」
『…この歌…急ぎましょう、翔太郎さん。私の予想が正しいなら、あそこではまだノイズと戦ってる人がいるはずです！』

◊

「え、ええっ!?何で!?これ、私どうなっちゃってるの?」

胸に浮かんだ歌。

それを口にした響の体は、聖遺物(ガングニール)からなるシンフォギアを纏う。

その変化に理解が追いつかず暫く呆気に取られる。

「おねぇちゃん、すごーい!」

そんな響へ幼女から声がかけられた。

相変わらず口からは自然と歌が流れ、状況についても理解はできないが、1つだけ分かることがある。

(そうだ…何だかよく分からないけど、たしかなことは、わたしがこの子を助けなきゃならないってことだよね)

響は幼女を抱え込むと、その場を離れるために軽く跳躍した。

だがシンフォギアによって強化された彼女の体は、本人が思っていた以上の力を発揮してしまう。

力に目覚めたとはいえ、まだその概要すら知らず、ましてや、今の今まで普通の女子高生として生活してきたのだ。

その力を使いこなす事など当然出来るはずもなく、過剰なパワーに振り回され、ノイズの攻撃をうまく避けることができない。

そうする内に、ノイズの一体が響へと飛びかかった。
避けられない、そう思った響は反射的に拳を突き出す。
「あ…わたしが…やっつけたの？」
自らがノイズを倒したことに驚く。
そんな彼女の元へノイズを弾き飛ばしながら一台のバイクがやって来た。
それに乗るのは風鳴翼。
それに気づいた響が「あっ」と声を上げるが翼からの返答はない。
彼女は立花響にとっての憧れであり、今この場においては戦場で歌う一振りの剣。
交差する2人の少女。
翼はバイクから飛び上がると歌をつむぐ。
「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ」
そして、響の目の前に着地すると彼女に目を向けることなく言い放った。
「呆けない！死ぬわよ、貴女は此処でその子を守ってなさい」
ノイズへと向かって走り出した翼の身を光が包む。
次の瞬間、風鳴翼はその身にシンフォギアを纏っていた。
そのまま手にした剣でノイズを切り裂いていく。
彼女の戦いに無駄はなく、的確にノイズの隙をつき殲滅する。

そんな姿を見た響は、呆けるなと言われたにもかかわらず呆然と見つめてしまう。
「すごい…やっぱり、翼さんは…」
だが、彼女を責めることはできないだろう。
一般人の目の前でいきなり、超然とした戦いを行われれば誰しもがそうなる。
最も戦場で敵は待ってくれない。
「あっ」という幼女の声に顔を上げれば、そこには大型のノイズが迫っていた。
思わず身構えるが、強大な相手に怯んでしまう。
ノイズはそんな響に対し手を振り上げ…
『ジョーカー、マキシマムドライブ』
「お熱いの、くれてやるぜ」
「『ジョーカーグレネイド』」
そのまま地面へと倒れ伏すことになった。
ノイズを打ち破ったのは熱き拳。
「仮面…ライダー。本当に、いたんだ」
驚く響の前に右半身を赤色へと変えた超人が着地する。
仮面ライダー、それはこの街の人々が名付けた希望。
ノイズに恐怖した人々の前に現れる一筋の光。

そんな存在に響の目は奪われていた。
そして、仮面ライダーもまた響をじっと見つめ返す。
やがて、先に口を開いたのは仮面ライダーの方だった。
「ビッキー、なのか？」
「え…えええええ!?しょ、翔太郎さん？」
仮面ライダーが変身を解いて現れたのは…身近な男性。（左翔太郎）
その事実に響は驚愕の声をあげた。

◇

「暖かいもの、どうぞ」
「あ…暖かいもの、どうも」
そう言って頭を下げてわたしにニコリと微笑んでくれるお姉さん。
そのまま、もう片方の手に持ってたコップを翔太郎さんに対して「お疲れ様でした」と手渡した。
美人さんだ…翔太郎さんが好きそうな人だな～。
あ、やっぱりいつもの調子でカッコつけてる。
「んんっ、鋼の探偵、ハードボイルドな男、左翔太郎にかかればこのくらいなんてことはありません。それより、友里さん今夜こそ2人でお熱い一夜を「翔太郎さん、お姉さん

ならもうどこかに行っちゃいましたよ？」…」

翔太郎さんはポーズを決めた状態で固まった。

翔太郎さんが仮面ライダーだって知った時はびっくりしたけど、やっぱり翔太郎さんはわたしが知ってる翔太郎さんだ。

やっといつもの日常が帰ってきたような気がするよ。

安心したら急に喉が乾いちゃって、お姉さん（友里さん）がくれた暖かいものを飲み込む。

たはー…生き返るなぁ～。

あ、アレ？なんか体が光って…

◇

「ただいま～」

「響!?もう！こんな時間までどこ行ってたの？」

未来はようやく帰ってきた親友に対し、安堵と心配からくるほんの僅かな怒りを向ける。

放課後、用事を済ませ探偵事務所へ向かおうとしたが、すぐに警報が鳴ったため避難していた。

しかし、警戒がとけても長い時間、響が姿を見せないため、気が気ではなかったのだ。
「ごめん…」
だが、疲れきった響はそんな彼女の心配をよそに生返事しか返すことができない。
響自身も、特異対策機動部２課やら仮面ライダーの正体やらで既に頭はパンク寸前だった。
しかし、そんな状態でも色々とタイムリーな風鳴翼についてのニュースは気になるらしい。
彼女の移籍についてのニュースが流れると飛び起きて、しっかりと聞きの体勢うつる。
それを未来は不満そうに見ていた。
それから数時間後、未来と響は同じベッドで横になる。
「ねぇ、未来…」
響は、未来に今日起きた事を話そうとするが直前で思い留まった。
２人の人物から口止めされた事を思い出しのだ。
（あの女の人…了子さんは今日のこと誰にも言うなって…それに翔太郎さんも…）
『いいか、ビッキー。簡単に権力にゃ靡かねぇハードボイルドな俺はこのまま帰る。俺らについて知りたきゃまた今度、事務所に来た時に話す。ただ、ヒナは連れてくるん

じゃねーぞ?あいつまで危険に巻き込む訳にはいかねぇ』

自分が2課へと連れて行かれる寸前、響に対してそれだけ告げると翔太郎は帰って行ってしまった。

少々薄情な気もするが、事務所にセレナが一人でいる事を考えるとあまり遅くまでは残られなかったのではないかとも思う。

左翔太郎の生活は基本的にセレナを中心に回っている。

血が繋がっているようには見えないが、2人の関係は側から見ると仲のいい兄妹のようだ。

そこまで考えて、未来に声をかけようとした響は、「やっぱり、何でもない」とお茶を濁す。

「…私は…何でもなくないよ」

そんな響に対し、未来は切なげに声を漏らした。

「響の帰りが遅いから本当に心配したんだよ?」

その声音は若干の震えを含んでおり、本当に心配をしていたのだという気持ちが伝わってくる。

響もそれに応えるように、事実を話せないながらも未来の体を抱きしめ、精一杯の感謝の気持ちを未来に返す。

立花響にとっての小日向未来は陽だまりであり、小日向未来にとっての立花響は太陽である。
彼女達もまた2人で1人なのだろう。

◊

翌日、友人達からの誘いを断り再び2課を訪れていた響は眼鏡の女性（櫻井了子）から自身の身に起きた変化、シンフォギアについての説明を受けていた。
だが、内容は専門的な事がほとんどであり、中々理解できるものでもない。
了子としてもこれから必要であれば、これから数度に分けて教えるべきかと考えていたところに響から質問が入った。
「あ、あの、じゃあ仮面ライダー…翔太郎さんもシンフォギアの適合者なんですか？」
「あぁ、翔太郎君達ね。彼らはシンフォギアとはまた別の方向からノイズに対抗する存在…誰が呼び始めたかは知らないけど仮面ライダー、というのは的確な表現ね」
そう言うと了子はスクリーンを操り、画面に6本のメモリと1つのドライバーを映す。
「この6本のメモリ、これがガイアメモリと言ってそれぞれが地球のある記憶を宿して

いるの。それでこっちのダブリュー状の物がダブルドライバー、これにさっきのガイアメモリを装填する事で装着者を仮面ライダーWへと変身させる事ができるの」
「最も、誰もが変身できるというわけでもない。特にダブルは特殊でな、現状、セレナ君の力が無ければ変身はできない」
補足するように大柄な男性(風鳴弦十郎)が付け加える。
「え、セレナちゃんですか？翔太郎さんじゃなくて？」
「あぁ、ここら辺は彼女の生い立ちに関わってくるんだが…流石にそこまで俺達が語るのは無粋だろう。仲が良いようだし本人達に聞いてみるといい」
「まぁデリケートなところだからぁ、あんまり突っ込み過ぎるのも嫌がられるかもね？話を戻すけど仮面ライダーがノイズに対抗できるのはメモリに秘められた地球の記憶のおかげ、メモリにはそれぞれ記憶と共に対ノイズ用のプログラムとも言うべきものが刻まれているの」
そこで了子は区切るようにコーヒーを口にする。
「ふぅ…ただ、このガイアメモリにも問題があってね。翔太郎君達が持っているような純正化されたメモリをドライバーを通して使うならともかく、今出回っているメモリのほとんどが強い依存性や毒素を持っているわ。普通の人が使っちゃったらいずれ廃人になるのは避けられないでしょうね」

「出回ってる…ってガイアメモリは、シンフォギアみたいに特別な物なんじゃないんですか!?」
「シンフォギアに比べれば直接聖遺物を使わない分、随分と量産しやすいのよ。その分、一つ一つの出力はシンフォギアには遠く及ばないのだけれど、中にはメモリとの相性が良すぎてとんでもない力を手に入れちゃってるようなのもいるわ。まぁ、そのほとんどがメモリの毒素で人格が歪んじゃってるんだけど…響ちゃんも怪しいおじさんについて行って売りつけられたりしないようにね?」
「怖いこと言わないでくださいよ～」
震えながら自分の体を抱きしめる響。
ガイアメモリの話を聞いた響は、それがまるで麻薬のように思えた。

◊

私は響の事を考えると乗り気になれずに、友達の誘いを断って1人で俯きながらとぼとぼと歩いていた。
今日こそは一緒に帰れるかと思ってたのに。
それに、響のあの反応、絶対に何かを隠してる。

翔太郎さんも響も隠し事が下手だから…

私は何度目かも分からないため息をつく。

ふと、顔を上げるとそこは普段通らない裏路地、いつの間にこんな所に来てしまったんだろう。

人通りが少ないせいか少しだけ不気味だな…

「お嬢ちゃん、浮かない顔してるね？」

「きゃっ!?」

ちょうどそう思っていた時、私は見知らぬ男の人に声をかけられて思わず声を上げてしまう。

何だろうこの人？

場所のせいかな、身なりはスーツ姿でちゃんとしてるのにどこか怪しげな感じがする。

「驚かせちゃったか…ごめんね？随分と落ち込んでるみたいだから声をかけたんだけど…お友達と喧嘩でもしたのかな？」

男の人は一見すると私のことを心配してくれてるようだった。

でも、この人顔は笑ってるんだけど目が笑ってない。

怖くなった私は「何でもないです」と言ってその場を離れようとする。

だけど、男の人は私の前に回り込んで通れないように立ちはだかった。
「まぁまぁ、そういう時1人で溜め込むのは良くないよ？誰かに相談するだけで随分と楽になるからさ」
その言葉を聞いた瞬間、頭に血がのぼっていくのが分かった。
ーそれは私が昨日、響に言いたかった言葉だ。
ーそれは、私がいつか翔太郎さんに伝えたかった言葉だ。
「結構です！」
私は怒りを必死に抑えながら強引に男の人の横を通り抜ける。
すると、後ろからドサッという誰かが倒れるような音と、ガシャンと何かが割れるような音が聞こえてきた。
「あっ…」
さっきまで、茹っていた頭が急激に冷え込んでいくのが分かる。
振り返った私の目にうつったのは、座って頭を抑える男の人と血のついた割れた空き瓶。
最悪の想像が頭をよぎった。
で、でも私はそんなに強くて押したつもりなくて…それよりも手当をしなきゃ。

混乱する頭では上手く考えがまとまらない。
とにかく怪我の手当てをしようとポケットからハンカチを出して、男の人の額に優しく押し当てた。
「ご、ごめんなさい。私、こんなつもりじゃ…」
「いや、いいんだよ…俺も少し強引だったからさ。このくらいの怪我なんて平気だし！それより、やっぱり君の事が気になるなぁ…結構思い詰めてるみたいだし少しだけでも話してみない？」
そう言って私を宥めるように笑いかけてくる。
やっぱりどこかこの人の笑顔は怖い。
だけど、私は怪我させてしまった負い目もあって、さっきみたい無碍に断ることはできなかった。
私は怪我をさせてしまった事への申し訳なさと、得体の知れない恐怖に体が震える。
少しだけ、本当に少しだけなら大丈夫かな？
そう思って頷きかけた私の頭に何かが被せられた。
「らしくねぇな、いつものお前なら簡単に気づきそうな手だろ」
その声を聞いた時、私はどうして？と思うよりも先に安心してしまった。
まだ何一つ状況は変わってないはずなんだけど、体の震えはいつのまにか止まってい

た。

私は、振り返りながら涙声でその人の名前を呼ぶ。

「翔太郎さん…」

「ようヒナ。タチの悪いナンパにゃ気をつけろって前から言ってんだろ」

Wの探偵／熱い一撃

翔太郎が未来の前に駆けつけたのは偶然か？
勿論、そんな事はない。
では何故ここに彼がいるのか、その答えは1日前まで遡る。

◇

「戻ったぞセレナ」
ノイズの発生現場から事務所に帰ってきた翔太郎は、いつもの場所に帽子を掛けて腰を下ろす。
そんな彼に対し、セレナはコーヒーを手渡すと壁際に設置されたベッドに腰掛けた。
「お疲れ様でした。数は多かったですけど、特別強力な個体がいなかったのは不幸中の幸いでしたね。それにしても…まさか響さんがシンフォギアの装者になるなんて、私…私…」
そう言って俯く彼女の表情は見えない。
翔太郎にはその姿が、友の身に起きた変化に不安を感じてるように見えた。

（無理もねぇ…あいつら仲良かったし、ダチがこれから戦いに巻き込まれるつーなら心配にもなるか）

椅子から立ち上がると、大仰な仕草を取りながらセレナの方へと歩いて行く。

彼が何かしら”キメ”ようとする時の癖だ。

「…心配すんなセレナ。危ねえ時は俺がちゃんと守ってやる。ガキの未来守んのはハードな男の仕事「すっごく興味深いです！ゾクゾクして来ました！」…そっちかぁ!?お前ビッキーの心配してんじゃなかったのかよ！」

翔太郎は予想と真逆の反応に思わず体勢を崩した。

顔を上げた彼女の目はキラキラとしており、響に対する心配は微塵も感じられない。

むしろ、翔太郎に対して何を言っているのかとばかりに呆れた目を向けた。

「心配だなんて…翔太郎さん、あの人はあなたが思っているよりずぅ～と強い人ですよ？戦いに向かない優しい性格だから時間はかかると思いますけど、いつか必ず私達と一緒に肩を並べる日が来ます。だって響さんですから」

そう言って笑うセレナからは響に対する絶大な信頼を感じる。

大人（翔太郎）にとって、響はまだまだ庇護すべき子供に見えるが、年の近いセレナからすれば彼女は守られるだけの存在ではない。

悩み傷つきながらも前を向いて自分で歩く道を選ぶ。

立花響とはセレナにとってそんな憧れ存在なのだ。
「それより、翔太郎さん『俺が』じゃなくて『俺たちが』ですよ。もし響さんを助ける時が来るなら、それは私達でやるべき事です」
「たくっ、ガキんちょが一丁前にカッコつけやがって…『あの子の全ては閲覧し終えました。もう興味も湧きません』なんて言ってたのが嘘みてえだな」
「そ、それは…もう！昔の話を掘り返すなんて翔太郎さんは意地悪です」
茶化すように昔話を始めた翔太郎に対してセレナは頬を膨らませる。
「カッコつけたがりは翔太郎さんも同じじゃないですか」と呟く彼女の顔は耳まで赤くなっていた。
この街に来た当初の記憶。
それは今のセレナにとって中々振り返り辛いものだ、主に羞恥的な意味合いで、だが。
翔太郎に言われたせいか、段々と当時のことを思い出してしまったのか彼女はベッドの上に寝転び、顔を枕に伏せると足をバタつかせ始めるた。
それを見て微妙に勝ち誇った顔をする翔太郎。
先ほどのセレナを少しカッコいいと思ってしまったのが悔しかったらしい。
そんな2人に突然事務所のドアを叩く音が聞こえてきた。
響であればノックはしない、未来であるならばすぐに名乗る。

そもそも2人ともこの時間は外出できないはずだ。
そう判断した2人はドアを開け来訪者(依頼人)を迎え入れた。

◇

私は、事務所を訪ねてきた依頼人の方にコーヒーを出すと翔太郎さんの横に腰掛けます。
どうやらこの方『堂島隆(どうじまりゅう)』さんは、娘さんに関係する事で私達に依頼に来たようです。
「ありがとう、嬢ちゃん。それに探偵のアンタも、こんな夜遅くにすまねぇな。最近、この街に引っ越してきたばかりでまだ色々と慣れてないんだ」
「いえ、いつ如何なる時も依頼人を見捨てない…それが極めてハードな男、左翔太郎です」
あぁ…またいつものが出てしまいました…
この人、時々こうしておかしくなるんですよね。
堂島さんが引いてないか心配です。
「ははっ、頼もしいな。じゃあ、すまんが早速依頼の話に入らせてくれ」
お、驚きました。
翔太郎さんのアレを無視するどころか、笑って流すとは…
この人、なんだか手慣れてる感じがします。

「本来、俺の依頼は警察に任せるべき事なんだろうが…コレが出てきちまったらな」
そう言って堂島さんが鞄から取り出したのはビニール袋でした。
受け取って中身を確認してみると…
「これは…ガイアメモリ!?」
「なっ!…っーか堂島さん、あんたコレがどういうモンか知ってんのか!?」
翔太郎さんが僅かに警戒の体勢を取ります。
確かに、先程の堂島さんの口振りはガイアメモリが何であるかを知っているようでした。
ガイアメモリは裏で密かに流通していると言っても、一般の方、それもこの街に引っ越してきたばかりの方が、その正体を知っているはずがありません。
だというのに、それを知っているということは…
私は気づくと翔太郎さんの服の裾を握っていました。
そんな私達を見ても堂島さんは特に動揺することもなく、冷静に話を進めます。
「ああ、俺は数年前まで警察にいてな。と言っても所属はこの街ではなかったんだが、何度か出向という形でこの街の事件にも関わったことがある。その時にこいつの存在を知ったわけだ」
その言葉に翔太郎さんは納得したようでした。

翔太郎さんは堂島さんに対しての警戒を解きましたが、私はまだ、翔太郎さんの側から離れることができません。

私の頭に、沢山の大人達が私を使って何かの実験をしている状況が浮かびます。

それはここに来る前の私の過去。

私達がビギンズナイトと呼ぶあの夜よりも前のこと。

ずっと痛くて…ずっと苦しくて…それなのに死ぬことができない…そんな毎日。

私には堂島さんがその時の大人達と被って見えてしまいました。

「…随分と嬢ちゃんを怖がらせちまったみたいだな。噂通り、嬢ちゃん達もコイツが何なのかは知ってるわけか。すまん、いきなり見せたのは少しデリカシーてのが無かったか…こんなんだから娘にも嫌われちまうんだ」

怯える私を見て、堂島さんが自嘲するように笑います。

決して堂島さんが悪い訳ではないのに、落ち込まれるその姿を見ると申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

依頼人を信じること、それは翔太郎さんから教わってもう2年が経つのに…

私は未だにそれが出来ない自分に腹が立ち、ギュッと翔太郎さんの服を握って目を閉じます。

大丈夫、大丈夫。

私は、そう心の中で呟くと翔太郎さんから離れて元の位置に戻りました。
「ごめんなさい、もう、大丈夫です。依頼の続きをお願いします」
そんな私を見て、翔太郎さんは少しだけ笑うとすぐに真剣な顔をして堂島さんへと向き直りました。
「安心してくれよ堂島さん。少し取り乱しちまったが、こいつは俺の相棒だ。アンタが思ってるよりずっと強えよ」
それ、さっき私が言った言葉じゃないですか。
もう！翔太郎さんてば実は根に持ってますね？
私より年上の男の人なのに本当に子供ぽいんですから…

でも…少しだけ、私を強いって言ってくれたのが嬉しくて、悔しいです。

堂島さんはそう言った翔太郎さんを見て驚いたような表情をすると優しく笑いました。
「参った、思った以上に頼りなるようだな探偵さんよ。…改めて依頼させてもらう。俺

が娘の部屋でコイツを見つけるに至った経緯なんだがな」

◇

その後、依頼人堂島の話を纏めるとこういった内容だった。

堂島の娘、奈那子は元々は親思いのいい子であったが、最近は家に帰ってくるのが遅く、それに対して注意しても反発するばかり。

最初は反抗期かとも思ったが、彼女がアルバイトで貯めていた貯金を大量におろしていた事を知り、問い詰めたところガイアメモリを買っていた事が発覚し現在に至る。

「娘の様子がおかしかった理由についても心当たりがあってな、最近、あいつと仲の良かった親戚と連絡がつかなくなっちまったのが原因だと思う。まぁ、親戚の奴は昔から変な事に巻き込まれやすい奴だったが、その度にうまく切り抜けてきた。だから俺は心配はしてねぇんだが、娘には相当ストレスだったみたいでな…」

「なるほど、それが原因で奈那子ちゃんはこのガイアメモリ…”ドッグ”の力を使って親戚の方を探そうとした、と」

「あぁ、おそらくな。幸い娘がコイツを使う前に取り上げることができた。だが、あの様子じゃまた同じ事を繰り返すかもしれねぇ…そこでお前さん達には、コイツを娘に売り

つけた張本人を捕まえて欲しいんだ。警察にも既に相談してるんだが、そこで元同期…刃野の奴にお前らの話を聞かされたってわけだ」

刃野幹夫刑事、翔太郎らに協力してくれる街の住人の1人だ。

彼は2人が仮面ライダーである事は知らないものの、翔太郎達に対しガイアメモリ事件に関する事の情報を提供してくれる。

その代わりに事件解決の手柄、犯人の逮捕などは刃野刑事のものとなる約束だが。

「最近この街に来た俺にも伝わるくらい噂になってるからな。この街で超常犯罪が起きたなら鳴海探偵事務所を頼れって。元警察としては、お前ら一般の人間にこんな危険な事を頼るのは間違いだってのは分かる。だがっ！一児の親としては放っておけねぇんだ！頼む、俺の娘を守るのに協力してくれ！」

そう言って堂島は椅子から立ち上がると翔太郎達に頭を下げた。

そんな彼の肩に翔太郎は手を置く。

「顔を上げてくれ、堂島さん。あんたの思いは十分伝わったぜ。売人については俺たちが必ず捕まえてみせる」

「探偵…すまねぇ、ありがとう」

「そうですね、売人については私達に任せてください！むしろ、心配なのは奈那子ちゃんが、私達が捕まえた売人とは別の人からメモリを買おうとしないかという事です」

「嬢ちゃん…へっ、言うじゃねえか。そっちは大丈夫だ。娘は俺が必ず説得する。家族、だからな今度こそちゃんと向き合うさ」

◇

堂島が帰った翌日。

翔太郎は朝から街の中を駆け巡っていた。

日頃からこの街を庭と称する彼でも、何の情報も無く特定の人物を見つける事は難しい。

だからこそ犯人を見つけるために彼は自分の足で手掛かりを探す。

「サンタちゃん、子供に好かれてるアンタに聞きてぇ事があんだけどよ」

「翔ちゃん！何、何どうしたの？」

ある時は、年中サンタのコスプレをしている看板持ちの男性からだったり、

「よぉ、２人とも！ちょっと話を聞かせてくれよ」

「あ～、翔ちゃん。おひさー」

「最近怪しい男から声をかけられなかったかって？う～ん、私達は会ったことないけど…あっ、友達から聞いた話ならあるよ。何でもぼっーと歩いてたら、いつの間にか知ら

ない場所にいて、街もいつもと違う感じでまるで別世界だったとか、何だか暑かったらしいし。そうそう、道が黒かったとかも言ってたような…」

「よし、詳しく教えてくれ！…そういやお前ら学校は？」

「今日は開校記念日なんだ～」

また、ある時はアイドルばりの女子高生からだったり、と様々な人から今回の事件について聞き回る。

そして、ある程度の情報を得た上で翔太郎は最後に怪しげな風貌の男の元へ向かった。

「つーわけで情報屋、頼みがある」

「翔ちゃん。ハードボイルド気取るのはいいけど、今日日いないよ？そんな何でも知ってる情報屋。常識疑われちゃうよ？」

「うるせぇ！」

その男は通称ウォッチャマンといい、街中の美女やB級グルメを撮影してブログに掲載する趣味のあるブロガー。

通称のウォッチャマンもネット上での彼のハンドルネームであり、本名については不明だ。

だが、行動範囲がとにかく広く、この街において彼以上に情報を多く仕入れる人物は

そうはいないだろう。
「ふふ～ん。翔ちゃん、もう君が何を聞きたいかていうのはボキに分かってるよ。最近、若い子に対してガイアメモリを売りつけてる売人を探してるんだろう？」
「相変わらず情報がはえーな。分かってんならさっさと教えてくれよ」
「焦らない、焦らない。ここ最近でのガイアメモリの売人については２人目撃情報がある。特徴は２人とも黒いスーツ、片方は白いスカーフに一点だけ血が滲んだような模様の男、ただそいつは子供と取り引きしたことは無いみたい」
「そうか、つまり俺が探してる売人てのは」
「そう、もう１人の黒スーツに間違いないね。そっちは特別目立った特徴は無いみたいだけど、可愛い子ちゃんばかり狙ってるみたいだよ？それも結構いいところのお嬢さんの方が多いみたい。そして、姿を現わすのは学生の下校時間」
「夕方てわけか、もう時間がねぇな…ありがとよ」
翔太郎は現金をウォッチャマンに手渡すと足早にその場を去る。
犯人が姿を見せるまでもう時間がない。
ポケットから携帯を取り出すとセレナへと電話をかけた。
『はい、セレナです。翔太郎さん、情報は集まりましたか？』
「ああ、サンタちゃんからは子供…小学生は被害にあってねぇことを教えてもらった。

クイーンとエリザベスからは売人と会った事があるのは女子中学生から女子高生にかけて、それも悩み事を抱え込んだ奴ばかりだったてのを聞いたぜ」

『そんな…女の子ばかりを狙うなんて、許せません！』

同性として思う事があるのか語気が荒くなる。

だが怒りを抱いているのは翔太郎も同じだ。

彼はこの街を、街に住む人々を泣かせる決して許しはしない。

「この街で好き勝手したこと、後悔させねーとな。セレナ！ウォッチャマンのおかげで次、奴が現れる場所については俺に検討がついてる。お前は相手のメモリの能力について検索してくれ」

『分かりました！すぐに地球の本棚に入ります。キーワードは？』

「俺が集めた情報で鍵になるのは４つ。いつの間にか迷い込んでた”別世界”、いつもと違う”街”、この時期に暑かったつーことから”熱”、そして”黒い道”だ」

『別世界、街、熱、黒い道…ですね。結果が判明次第折り返します！』

「俺は先に現場に向かう。頼んだぜ”相棒（セレナ）”」

『任せてください”相棒（翔太郎さん）”』

◊

ーそして時は現在にー

「ほら手だしな、立てるか？」

「ありがとうございます…でも、翔太郎さんどうしてここに？」

未来は。翔太郎の手を借りて立ち上がると彼に問いかける。

その顔に先程までの不安はなく、落ち着きを取り戻しているようだった。

「仕事の一環でな。最近、女子学生を食いモンにするナンパ野郎が出回ってるから捕まえてくれってよ」

それを聞いたスーツの男は笑顔から一転、機嫌そうに顔を歪めると立ち上がって翔太郎を睨みつける。

「ナンパとは人聞きが悪いな。俺はただ、少しでもこの子の助けになればと思っただけだよ」

「さっきまでフラついてた割には元気がいいじゃねーか、頭の怪我はもういいのか？」

そう言われた男の人が少しだけ怯んだように見えた。

翔太郎の言葉につられて未来も視線をあげる。

仮にこれが彼の言うようにナンパだったとしても、自分が怪我をさせてしまったことに変わりはないと思ったからだ。
だが既にその男の頭からは血が流れていない。
むしろ傷跡すら残ってないようにもみえる、そこで未来も違和感を覚えた。
(ちょっとハンカチを当てただけなのにもう血が止まってる?額って傷の程度に関係なく血が流れるって聞いたような気がするけど…)
「悩みを抱えてる女子学生に対して、優しく声をかけ頼れる大人を演じて心の隙間に入り込む、それがお前の手口だろ?警戒心の強い子供には、怪我のふりなんかで善意を利用してな」
「なっ、ち、ちがう!俺は本当にその子に押されて怪我したんだ!」
男は慌てるようにして額を隠す。
そこまで見れば未来にも想像がつく。
おそらく、男は予め血糊や割れた瓶などといった小道具を用意して、この裏路地で人が来るのを待ち構えていたのだろう。
そして、たまたま通りかかった女の子に声をかける。
これが未来の考えた男の手口だった。
「一回成功したからって、何度も同じ手を使うのは芸がねえな。すぐに情報が集まった

ぜ三流ナンパ師さんよ…随分とこの街で好き勝手してくれたな！もう逃がさねぇぞ！」
男はワナワナと震え出す。
未来にはそれが図星を突かれて怒っているように見えた。
「黙って聞いていれば好き勝手言いやがって…俺はただ、もう一度だけ憧れあの子に会いたかっただけだ！そう、ノイズに殺されそうになった時、助けてくれたあの子に！こうやって声をかけていればいつか出会えると思ったんだ！」
血走った目で叫ぶ男は、まるで正気を失っているようだった。
未来には男の言っている言葉の大半が理解できなかったが、その姿から尋常ではない執念を感じとり、恐怖で後ずさってしまう。
そんな彼女を庇うように翔太郎が2人の間に割って入る。
「訳の分からねぇ事言いやがって。大人しく捕まりやがれ！」
「お前があの子に会うのを邪魔するってんなら、コイツで消し飛ばしてやるよ！」
『ロード』
男は懐からガイアメモリを取り出し首筋へと差し込む。
そうするとメモリは男の体内に吸い込まれるように入り込み、その姿を異形の者へと変えた。
「い、いやぁ…な、なにこの怪物!?」

怯えて震えだした未来を見て怪物、ロードドーパントはニタニタと笑う。
ガイアメモリの毒素による精神汚染、それが変身者の負の感情を増幅させているのだ。
「この力を使うと腹が減るんだ…お前達で飢えを癒させてもらおう」
そう言って手を伸ばしてくるロードドーパントを見て、未来は思わず目を瞑る。
怪人に捕まり生きたままその体を食られる、という最悪の想像が頭をよぎった。

だが、その瞬間が訪れる事はない。

彼女の前に立つのはこの街の希望

２人で１人の探偵（仮面ライダー）なのだから。

翔太郎さんは胸のポケットから、Bのメモリ、『バット』のギジメモリをカメラに挿入する。
するとカメラ、メモリガジェットはコウモリの姿を模した形を取り、ロードドーパントに強烈なフラッシュを浴びせた。
ドーパントは堪らず伸ばした手を引っ込め顔を覆う。
「今だ、ヒナ！このまま真っ直ぐ走って逃げろ！そうすりゃ事務所の近くの道に繋がってる。俺が囮になってる隙にさっさと行け！」
「そんな!?翔太郎さんを1人置いてなんて行けません！一緒に逃げましょう！」
未来は翔太郎の服を掴むと強く引っ張った。
以前、響と一緒に事務所で見せてもらったこともあり、彼女も翔太郎がメモリガジェット（不思議な機械）を多く持っているのは知っている。
だが、それらを駆使してもこの怪物を倒す事は不可能だと思えた。
未来には、翔太郎が自分の命を使って逃がそうとしているように思えたのだろう。
その目に涙が浮かんでいた。
それを見た翔太郎は未来に向き直り、彼女の涙を拭うと諭すように言う。
「なぁヒナ。俺がいつも言ってること覚えてるか」
「…え？」

そう言われた未来の頭にとある言葉が浮かぶ。
「…”この街に住んでいる人は誰にも泣いていてほしくない”…」
「そうだ、だから俺がお前を泣かせるわけねえだろ。…それでも心配だってんなら、お前に被せてる”それ”まだ預かってろ。俺のお気に入りだからな、それを返してもらうまでは死なねえよ」
翔太郎の言う”それ”とはこの場所に来た時、未来に被せた帽子。
彼にとっては己が師より受け継いだ大切なもの。
普段から探偵として、この街に住む人々の悩みを解決してきたのを知っている。
だからこそ、その言葉には重さがあった。
「…分かりました。はやく、出来るだけ早く帰ってきてくださいね？」

◊

翔太郎が未来がその場から走り去るのを見届けるのと、ロードドーパントの目が回復するのはほぼ同時であった。
「無駄なことを…どこに逃げようが俺の能力の前では無意味だ」
「知ってるさ。お前の能力、そいつは超高速と超高熱を使って空間を切り裂き、別次元に道を生成する。お前がターゲットを路地裏に誘い込んだのもこの能力の応用だ」

ドーパントの目が驚愕に開かれる。
自身の真の手口、それを言い当てられるとは思っていなかった。
「驚くことはねえよ、俺には優秀な相棒がついてるんでな」
そう言って翔太郎が取り出すのは事件解決の要（ダブルドライバー）。
事務所内にいたセレナの腰にダブルドライバーが現れる。
彼女はそれを確認すると読んでいた本を閉じて立ち上がった。
「やっと出番みたいですね。待ちくたびれましたよ」
『サイクロン』
「半分力貸せよ、セレナ」
『ジョーカー』
そして、2人は1つになる。

『「変身」』

『サイクロン』／『ジョーカー』

彼らがこの2年間、街を人を泣かせる悪党共に投げかけ続けてきた言葉。

それは、仮面ライダーWの象徴。
『さぁ、お前の罪を数えろ』

◇

「ノイズ以外の高エネルギー反応を検知！…このパターンはドーパントです！」
司令室から連絡を受けた友里がメディカルルームにいた弦十郎達に伝える。
「ドーパント、だとぉ!?」
「あらら、これはすぐに準備をしてもらった方がいいのかしら…」
ガイアメモリについての説明を受けていた響は、突然の展開についていけず呆けてしまう。
今まで頑なに態度を崩さなかった翼も顔をしかめていることから、少なくとも良い事ではなさそうだと思った。
やがて、弦十郎らに連れられて司令室へと向かうとモニターにはノイズとは違う、禍々しい怪物が映っている。
「な、何ですか、この怪物？」
「これがドーパント、さっき説明したガイアメモリの力を使って人間が変身した姿よ」

「えぇぇぇぇ!?」
響は信じられないと叫び声をあげた。
だが、無理もない。
初めてドーパントを見た人間の反応としては真っ当なものだろう。
「あら? 既に仮面ライダーが交戦中みたいね。これなら、翼ちゃんに向かってもらう必要もなさそうだわ」
そう言われた翼に反応はない。
ただモニター画面を食い入る様に眺めている。
了子はそんな彼女に嘆息した。
「あ、あの了子さん」
「あら、どうしたの響ちゃん?」
「翔太郎さん達…仮面ライダーの格好が昨日、見た時と違ってるみたいなんですけど」
「あぁ、そのことね。いいわ、さっきの説明の続きといきましょう」
◇
サイクロンジョーカー。
それが今、ロードドーパントと対面している仮面ライダーのフォーム。
２人に最も相性の良いメモリからなるそれは、仮面ライダーWの基本形態だ。

『翔太郎さん、ロードドーパントは距離をあければ高熱を飛ばしてきます！このまま接近戦で決着をつけましょう』
「わかってらぁ！」
サイクロンの風の力を利用した蹴りは、確実に敵にダメージを与えている。
翔太郎の格闘センスもあり、このまま押し切れるかと思われた矢先、ロードドーパントが全身から高熱のエネルギーを放った。
至近距離にいたWはそれを受けて距離を離されてしまう。
「舐めるな！俺の彼女への想いはまだまだこんなものじゃない！」
「うおっ!?」
『大丈夫です！高熱に関しては風で防ぎました。それより、距離を開けられたのが痛いですね』
セレナの声には若干、焦りが込められている。
というのもロードドーパントが持つ、もう一つの性質のせいだ。
『ロードドーパントは能力の対価に、自分の肉体を消費します…それも、普通の食事では補えない程の速度で』
「てことは、まさか…」
『ええ、この場を逃がしてしまえば、減ったエネルギーを蓄えるために1番効率の良い方

法…人体の直接吸収、つまり人を食べようとするはずです』
「冗談じゃねぇ!これ以上、こいつに街の人達を傷つけさせてたまるかよ!」
　再び距離を詰めようとするが、ロードドーパントは高熱によるエネルギー弾を飛ばしてきて中々近寄らせようとはしない。
　先程の組み合いから接近戦では不利と悟ったのだろう。
　時間をかければかける程、ロードドーパントはエネルギーを消費し飢えを募らせる。
　いずれは戦闘を放り出し、減った力の補給へと向かうはずだ。
　それだけは何としても防がねばならない。
『このドーパントのメモリ、中々強力なものみたいです。さっきから全然近寄れません…いっそトリガーを使いますか?』
「そうだな…だが、下手に追い詰めて距離があるまま逃げられるのも厄介だぜ…あっ!ヒートトリガーで行くぞ」
『えぇっ!サイクロンを変えちゃうんですか?ヒートの熱量じゃ多分、勝てない気がするんですけど、せめてルナにしません?…なんだか嫌な予感がしますし』
「うるせぇ!黙って俺を信じろ」
　Wはドライバーからサイクロンとジョーカーのメモリを引き抜くと新たに、赤と青のメモリを挿入する。

『ヒート』／『トリガー』

ハーフチェンジ、２つのメモリを使って戦う仮面ライダーＷの特徴だ。

セレナの担当するソウルサイド、翔太郎の担当するボディサイド。

それぞれのメモリを変化させることによって、状況に適した力を使うことができる。

今回、彼らが選んだのは最高火力のマキシマムを放つヒートトリガー。

トリガー専用武器、トリガーマグナムを持ち、高い攻撃力を持つがメモリ同士の相性が良すぎるために、かえって不安定なハイリスクハイリターンの姿。

『言われた通り、ヒートに変えましたけど…この距離じゃまだマキシマムの圏内に届いてませんよ?』

「いいから見てろって！」

『ちょっ、翔太郎さん!?』

翔太郎がロードドーパント相手に選んだ行動は…突貫。

敵は彼の思わぬ行動に虚を突かれ、一瞬膠着するがすぐ様に高熱を飛ばす。

飛んでくる熱弾の内、何発かは撃ち落とすことが出来るが、それでも全てを弾く事は出来ずに残りの攻撃がＷに直撃した。

「気でも狂ったか、仮面ライダー！」

・

ロードドーパントは煙の中に消えたWを嘲笑う。
だが、その顔は一瞬にして崩れた。
立ち込める煙の中、Wはその歩みを止める事なくドーパントに向けて進んできていたのだ。
『トリガー、マキシマムドライブ』
「決めるぜ、セレナ！」
『あぁ、もう！後で未来さんにお説教してもらいますからね』
『トリガーエクスプロージョン』
トリガーマグナムから放たれた炎は、文字通り必殺の一撃となってロードドーパントの身を包む。
そして、W最強の一撃は遂にスーツの男の体内からメモリを排出させ、破壊することに成功した。
「これで、事件解決だな」
『こんなの…無茶苦茶です』

◊

翔太郎が事務所のドアを開けた瞬間、未来は彼に飛びついた。
少し前に目覚めたセレナから、翔太郎の無事を聞いてはいたが、それでも実際に目にするまでは心配だったのだ。
「良かった…本当に良かったです。翔太郎さん」
涙を流しながら良かったと繰り返す。
セレナや響に比べれば、随分と大人びて見えるが、彼女もまだ子供である事に変わりはない。
そもそもあんな別れ方をすれば、誰だって不安になるというものだ。
だから、未来が迷子になった後、親を見つけた幼子のようになるのも無理はないだろう。
翔太郎は、そんな未来の背中を優しく叩いてあやした。
「心配かけたなヒナ。…あんな事言ったのに、結局泣かしちまったか」
「いいんです。これは、嬉しくて泣いてるのもありますから」
未来は、翔太郎の言葉にようやく顔を上げて微笑む。
そして、手に持っていた帽子を彼に手渡した。
「帽子、お返しします。やっぱり、翔太郎さんが被っている方が似合ってますね」
「似合ってる、か。へへっ…少しは俺も、おやっさんに近づけたのかもな」

互いを見て、笑い合う2人。
事務所の中は和やかな空気に包まれ、一件落着かに思えた。
だが、翔太郎の無茶に付き合わされたセレナが、それを許さない。
「いい雰囲気のところで申し訳ないのですけど、未来さん、実はお耳に入れたいことが」
「どうしたのセレナ？」
セレナが手招きして、未来の耳にボソボソと呟く。
それを聞いていた彼女の顔が、段々と鬼の形相へ変わる。
まずい、そう思って再び事務所を出ようとした翔太郎だが、その腕がガシッと掴まれた。
「どこに行くんですか？翔太郎さん」
平坦な声音が返って恐怖を煽る。
元凶となったセレナに目を向けるが、彼女も笑ったまま動かない。
やはり先ほどの無茶に、彼女も思うところがあるようだ。
「少しお話し、しましょうか？」
「はい」
この日、翔太郎は何度目かも分からない誓いを立てた。
未来は絶対に怒らせないようにしようと。

◊

その後の事件についてだが、売人の男は警察に引き渡した。
刃さんから聞いた話ではあの男、根津は2年前のノイズ災害の生き残りらしい。
元は真面目な人間だったようで、奴の関係者は根津が捕まった事に驚いてようだ。
何故そんな奴が売人になったのか。
これは俺の推測になるが、おそらく奴は、災害の時にシンフォギアの装者を見たのだろう。
生来の真面目さ故に、礼を言いたいと思ったが、情報規制により手掛かりが何一つ得られなかった。
落ち込んだ根津は、ある時、ガイアメモリの噂を聞いて思いついたのだ。
また、怪物が彼女達に会えるのではないか、とな。
そうして奴は、ガイアメモリについて調べてるうちに、その闇に呑まれちまった。
真実は本人の口から聞かない限り、分からない。
だが、この街に住んでる奴が根っからの悪人だったなんて、俺は思いたくねぇ。
奴が罪を償ってまた、社会に戻ってきた時には詳しく話を聞いてみたいと思う。

まぁ今は、この街に不幸をばら撒く人間が減った事を良しとするか。
売人全てがこの街からいなくなった訳じゃないが、少なくとも今回の依頼者の心配事を1つ片付けることが出来たのは間違いない。
事件の翌朝、堂島さんに結果については報告した。
依頼を解決した事について感謝されたが、また、この街を出て行くことになったようだ。
行方不明になった親戚が見つかって今度は、その人も含めた3人でまた暮らすらしい。
この街の汚い部分ばかり見ていないか不安だったが、「またいつか遊びに来る。今度は娘を連れてな」という言葉を聞いて安心した。
娘さんともちゃんと話し合って、和解したようだし、あの家族はもう大丈夫だと思う。
それにしても…ウチのじゃじゃ馬も堂島さんの娘くらい物分かりが良くならないものか…
「翔太郎さん…じゃじゃ馬って誰の事ですか？まさか、私じゃありませんよね～、また未来さんにお説教してもらいますか？」
「おい、セレナ！お前人が打ってるもん勝手に見るんじゃねーよ！」

「どうせいつもの変な報告者じゃないですかそれ！結局、私が作り直すんですから、どのタイミングで見たって一緒ですぅ！」

こいつは、相変わらず騒がしいぜ。

結局ヒナにも、セレナから告げ口されたせいで2時間ほど説教されるし、本当にロクな事しやがらねえ。

堂島さんに子育てのコツを聞いておくんだった。

Cの捜索／覚悟の意味

探偵というものに休日は無い。
例え日曜、祝日であろうと常に依頼を待つ。
何故かって？
事件というものは時も場所も選んじゃあくれねえからだ。
だから俺は事務所に座って、風が事件（そいつ）を運んでくるのを悠然と待つのさ。
「翔太郎さん、今日って何か予定ありますか？」
そう言って問いかけてきたのは、俺の相棒セレナ。
優秀な頭脳を持つが、まだまだ未熟なお子様だ。
時にとんでもない事をしでかして、依頼人を含めて騒然とさせることもある。
まぁ、そんな相棒をフォローすんのも、極めてハードな男の役目てやつだ。
「いや、今日はまだ予定はねぇ。だが、依頼人を待つのも仕事の内だ。そういった意味じゃあ予定が入っているとも言えるな」
「良かった！それなら、もうすぐ響さんが来るそうなので出かけたりしないでくださいね」

…こいつは、俺の話を聞いていたのだろうか。

◇

「ありがとう、セレナちゃん」

数分後、事務所を訪ねてきた響にセレナがコーヒーを渡した。

彼女がここに来るのは、シンフォギアの力に目覚めてから、初めてになる。

翔太郎とセレナは仕事の関係で忙しく、響はノイズの対応に追われ、中々時間をつくることができなかったのだ。

「いえいえ、それより響さん。今日はどうしたんですか?」

「実は、翔太郎さん達に折り入ってお願いがありまして…」

いつにもない真剣な表情の響。

彼女は一度言葉を区切った後、一息ついてから意を決したように口を開いた。

「わたしを、翔太郎さん達の助手にしてください!」

「却下だ」

「って、えぇぇぇぇ!そ、即答ですか!?」

響の懇願に対する翔太郎の回答は、取りつく島もない拒絶。

ショックを受ける彼女に、翔太郎は話にもならないというように首を振った。
「いいか、ビッキー。俺は遊びで探偵をやってるわけじゃねえ、探偵てのは、どうしようもなく困った人達が助けを求めてくる仕事だ。それに応えるだけの覚悟がお前にあるか？人助けを趣味にしてんのは知ってるが、仕事として受ける以上訳がちげえぞ」
彼の言葉からは普段とは違い、冷たいとすら思えるほどの厳しさを感じる。
だが、それだけ翔太郎が探偵という仕事に、覚悟を持ってのぞんでいるのが分かった。
そして、それが分かったからこそ、響は重ねて懇願する。
「自分が全然ダメダメなのは分かってます。でも、それでも…わたしは”胸の覚悟”というのが何なのかを知りたいんです！」
彼女が心の底から絞り出した言葉が、事務所の中に響く。
その言葉に込められた思いは、２人にも強く伝わっていた。
只事ではない、そう思ったセレナが響に問いかける。
「なにか、あったんですか？」
「…うん。あの日、セレナちゃん達がロードドーパントていう怪物と戦った後なんだけどね」
そう言って響は数日前の出来事を話し始めた。

◇翔太郎さん達とロードドーパント（仮面ライダーW、怪物）の戦いを見ていたわたしに、アラーム音が聞こえてきた。

「ノイズの出現を確認！」

「くっ、仮面ライダーが交戦しているこのタイミングでか！場所によっては大規模な乱戦になってしまいかねんぞ…直ぐに特定してくれ。それから一課にも我々二課がこの件を担当することを通達！」

風鳴司令の言葉に、二課の皆さんが頷くとそれぞれテキパキと動いていく。

す、凄い…一瞬で空気が変わっちゃった。

「出現位置特定、座標出ます…リディアンより距離２００！」

「これは…仮面ライダーが戦っている場所とは少し離れているけど、ノイズの動きによっては接触しかねないわね」

了子さんの顔に汗が浮かぶ。

そっか…モニターに表示された地図上では、たしかに離れているように見えるけど、ノイズの動きなんて誰にも分からないよね。

もし、翔太郎さん達の方に動き出しちゃって、ノイズと怪物が一緒に襲いかかってきたら…２人がやられる？

そ、そんなの絶対に嫌だ！
そう考え込むわたしをよそに、翼さんが走り出していた。
って見てる場合じゃない、わたしも行かないと！
「待つんだ！君は、まだ…」
「わたしの力で誰かを助けられるんですよね？今は翔太郎さん達もいないし、戦えるのがシンフォギアを使える私と翼さんだけなら…わたし、行きます！」
風鳴司令に呼び止められたけど、わたしだって戦う力があるんだ。
この力で誰かを助けることができるなら、躊躇ったりなんてしない！
◇
わたしが、ノイズの出現場所に追いつくと翼さんはもう戦っていた。
ノイズの数はとっても多いけど、それに怯むことなく剣を降ってる。
よーし、わたしも！
ちょうど翼さんに向かって襲いかかっていた、ピンク色の大きなノイズに、わたしは飛び蹴りを放つ。
「翼さん！」
わたしの呼び掛けに反応して、翼さんがノイズの後ろに回る。
やった！

ちょっとした事だけど、一緒に戦うことができたんだ。
そう思うとつい、にやけてしまう。
そして翼さんは、そのまま大っきな剣でノイズを切り裂いた。
今のでノイズは最後だったのかな。
あれだけ居たのに、もう周りには見当たらない。
そう思ってると、翼さんの無線機からこの場所のノイズを全部倒したこと、翔太郎さん達が怪物を倒したことが聞こえてきた。
良かった…2人とも勝ったんだ！
それが嬉しくてわたしは、翼さんに駆け寄った。
「あの2人、流石仮面ライダーですね！」
ニコニコと笑って話しかけるけど反応はない。
ただ、浮かれていたわたしは、それに構わず続ける。
「私も今は足手まといかもしれないけれど、一生懸命頑張ります！　だから、私と一緒に戦ってください！」
「…そうね」
わたしは、翼さんが頷いてくれた事が嬉しかった。
これからは、翔太郎さんやセレナちゃん、翼さんと一緒に困ってる人を助ける事が出

来るんだ！
　そう思ったんだけど、それはすぐに否定されてしまう。
「貴女と私、戦いましょうか」
「えっ…」
　振り返った翼さんの表情は、まるで仇を見ているようで怖い。
　わたしは、言葉が間違って伝わってしまったのかと思って、慌てて訂正する。
「そ、そういう意味で言ったんじゃありません！わたしは「そんな事分かってるわ」っ、だったら、どうして？」
　なんで翼さんが怒ってるのか、分からない。
　わ、わたしはただ一緒に戦えればと思っただけなのに…
　混乱しちゃったわたしに、翼さんが答えた。
「私が貴女と戦いたいからよ」
「え？」
　そんな、どうして!?
　何故という疑問で頭がいっぱいになる。
「私はあなたを受け入れられない。力を合わせ、共に戦うことなど、風鳴翼は許せるはずがない」

そんなわたしに構わず、翼さんは剣をかかげた。
やっぱり、分からない。
一体、どうしたらいいの!?
「アームドギアを構えなさい。それは常在戦場の意思の体現。貴女が、何者をも貫き通す無双の一振り、ガングニールのシンフォギアを纏うのであれば…胸の覚悟を構えてごらんなさい!」
わたしの頭は、もう限界だった。
常在戦場て何?アームドギアって、胸の覚悟てどういうこと!?
訳が分からなくて思わず叫んでしまう。
「覚悟なんて、そんな…わたし、アームドギアなんて分かりません!分からないのに、構えろなんて、それこそ全然分かりません!」
自分でも何を言っているのか分からないけど、思ってることを翼さんにぶつけた。
そうする事しか、わたしには出来なかった。
翼さんは、そんなわたしを冷たい目で見つめる。
「覚悟を持たずに、ノコノコと戦場を遊び半分で歩き回る貴女が、奏の…奏の何を受け継いでいるというの!」

◇

「その後、翼さんに剣を投げられて、でも風鳴司令が助けてくれたから大丈夫、だったんですけど…翼さん、泣いてたんです」

その時を思い返しているのか、響はコーヒーカップを強く握るしめる。

「わたしにはその理由が分からなかったし、その後も翼さんを傷つけちゃったけど…それでも、今のままじゃダメなんだって、翼さんの言葉を理解しないといけないんだって思いました！」

だから、と叫び、響は立ち上がって勢いよく頭を下げる。

「翔太郎さん達に〝覚悟〟を教えて欲しいんです！わたしが知ってる人の中で、２人以外にはこんな事頼めません！だから、どうかお願いします！」

そんな響を見て翔太郎はなるほど、得心した。

彼女が急に助手になりたい、などと言い出した原因は他でもない、風鳴翼にあったのだ。

探偵として働きたいのではなく、それを通して翔太郎達から彼女の言った覚悟、というものを学びたいのだろう。

探偵助手になる動機として不純ではあるが、それでも少女が必死になって考えた事を無碍にする気にはなれなかった。

だが、それを考慮しても簡単に許可などできない。
「ビッキー、お前の気持ちは伝わった。だがな…それでも俺は頷けねぇ」
翔太郎とて、彼女を助けてあげたい気持ちはある。
それなりに長い付き合いだ、響がいい加減な気持ちで言っている訳ではない、というのも分かった。
しかし、探偵というのは時に、自分の体を盾にしてでも、依頼人を守らなければならない。
特に彼らが扱う依頼は、ガイアメモリが関係している事が多く、命を失う危険と常に隣り合わせだ。
そんな事に、シンフォギアという力を持っているとはいえ、まだ子供の響を巻き込みたくは無かった。
「いいじゃないですか、翔太郎さん。響さんが、これだけ頼んでいるんですし」
そんな風に考えていたところに、セレナから響への助けが入る。
ガイアメモリの危険性、それを一番よく知っているはず彼女が、許可を出そうとしていることに顔をしかめる翔太郎。
そんな彼の目に、セレナが何かを隠し持っているのが見えた。
「お前、それ何持ってんだ?」

「え？いや、何でもないですよ？」
何でもないと言う割には、翔太郎と目を合わせようとしない。
彼女が、隠し事をしているのは明白だった。
「おい、それちょっと見せてみろ」
「お断りします。…え、ちょ、翔太郎さん!?どこ触ってるんですか、変態！スケベ！ハーフボイルド！」
「喧しい、お前みたいなお子様には興味ねぇよ！いいからさっさと見せやがれ！つーかハーフじゃねえ、ハードボイルドだ！」
実力行使によって取り抑えられたセレナ。
途中、抵抗したものの体格の差は大きい。
すぐに隠していた物、紙袋は翔太郎の手の中へと収まってしまう。
彼が袋の中を漁ったところ、出てきたのは風鳴翼のCDだった。
それは以前、響がセレナのために予約をしていた物と同じである。
「セレナ、お前まさかこんなんで買収されたのか？」
「…てへっ」
「ふっざけんな！たかがCDの1枚や2枚で靡いてんじゃねえよ！」
「むっ、翼さんのCDはたかがじゃないです！それに、助手にするくらい、いいじゃない

ですか！この前は俺が響のこと守ってやる～だなんてカッコつけてたクセに！」
「はぁっ!?それだったらお前、響さんはあなたが思ってるほど弱くありません～なんて言ってたろ！」
「その後、ちゃんと助ける時が来たなら～とも言いました！」
小学生のようなやり取りを始めた２人。
響は２人を止めようかとも思ったが、元はと言えば自分の頼み事が発端である。
それにＣＤも自分が渡した物であるため、余計に止めに入り辛かった。
（うぇぇぇ、私じゃこの２人は止められないよ～、助けて未来ぅ）
困り果てて、この場にいない親友に助けを求めるが、当然答えが返ってくるはずもない。
このまま低レベルな喧嘩が延々と続くかと思われたが、突如聞こえた事務所のドアを叩く音に、３人とも動きを止めるのだった。

◇

「お願いします…猫を、父の猫を探してください」
そう言って事務所を訪ねて来たのは、『中条朱美』。
今回、鳴海探偵事務所に猫探しの依頼持ってきた女性だ。

彼女の説明では、2週間ほど前に資産家の父親が亡くなっており、その父が可愛がっていた愛猫が居なくなった、とのことであった。

「父は厳格で、私達親族にはいつも怒鳴っていたような人でしたが、それでもこの子、チャオには優しく、まるで別人のように接していました。生前は揉め事も多かったのですが…今となってはこの子だけが父との思い出なんです。なんとか探してもらえませんか?」

中条は涙を隠すようにハンカチで顔を覆う。

彼女は体を震わせており、全身から悲しみが伝わってくるようだった。

それに対して、一番大きな反応を示したのは響である。

目に涙を溜めながら、翔太郎の方へと向き直った。

「翔太郎さん!この依頼、受けましょう!例えお父さんがどんな人だったって…思い出の綺麗なところは大切にしたいじゃないですか!」

「ビッキー、お前…」

何かを言おうとして、口を閉じる。

翔太郎は頭をガシガシとかくと、諦めたように笑った。

「たくっ、あたかもウチの所員みたいな反応してんじゃねえよ。マダム、この依頼、お受けしましょう。本来、猫探しなんてのは管轄外ですが事情が事情だ」

「一番の得意分野のくせに何言ってるんですか」
「そうなの？」
「はい！翔太郎さんてば、猫というかペット探しに関してはだけは、名探偵の名に偽り無しなんです！」
「ええ、私もこの事務所の方が、ペット探しだけは世界一だと聞いて来ましたの」
（俺の噂、どんだけ尾ひれついてんだ…しかも、ペット探しだけって何だよ！ペット探しだけって！）
依頼人の言葉に内心、不満を感じていたが表情には出さない。
下手に反感を買われて、依頼を取り下げられたら困るからだ。
翔太郎は一つ今回の依頼で、響を試すことにした。
（マダムには悪いが、少しばかり付き合ってもらうぜ）

◇

依頼人が帰った後の事務所内で、再び俺とビッキーは向かい合う。
助手の件について、まだ話が終わっていないからだ。
「翔太郎さん！私、諦めません！今日は認めてもらうまで帰らないつもりです」

「お前たしか門限つきの寮だったろ」
「説得します！この通り、お泊まりの準備もして来ました！」
後ろの方で、「響さんとパジャマパーティーです」なんてアホな事言ってる奴がいるが、冗談じゃない。
「勘弁しろよ、ビッキー。俺達ただでさえ、あそこの先生には迷惑かけてんだから」
「あぁ！コックローチの時とかですね。あれは…今思うと申し訳なかったです」
こ、こいつ他人事みたいに言いやがって！
まだ、セレナの暴走特急具合が酷かった頃、俺たちは依頼の関係で、リディアン音楽院を訪れた事がある。
そん時は、不審者に間違われるわ、セレナの奴が平気でリディアンの女生徒拉致るわ、事件解決そっちのけでダンスに興味示すわで散々だった。
当分、リディアン関係で問題は起こしたくねぇ。
それに、多分ヒナにも連絡入れてねえだろうしな。
あいつに黙って、ビッキーを夜遅くまで連れ回したのがバレたら、絶対また怒んぞ。
いや、俺が黙って来いとは言ったけどよ、まさか泊まりに来るとは…
か、体が震えてきやがった、今日はビッキーを帰らせねぇと、色んな意味で身が持たねえ。

「ビッキー、ひとまずお泊まりは無しだ」
「え、じゃあ助手にしてくれるんですか!?」
「いいや、まだだ。この依頼でお前が俺の助手に相応しいか、テストをしてやる。言っとくが猫探しの依頼でも、引き受けた以上は大事な仕事だ。お前が不甲斐ないとこ見せたんなら、すぐにテストは中止する」
「なるほど…分かりました!·望むところです」
どういった反応を示すか、不安だったが何とか納得したみたいだな。
しゅっ、しゅっとか言ってシャドーボクシングを始めやがった。
…こいつ、猫探しで何する気だ?
「それなら今すぐに街に出るぜ、ついて来な」
「はい!」
「はーい!」
いや、セレナ、ビッキーを後ろに乗せるからお前は留守番だろ。

「セレナちゃん、置いて来て良かったんですか?」

「仕方ねぇよ、足がないんだからな」
あのじゃじゃ馬娘、最後の最後までぐずりやがった。
後で機嫌とっとかねえと、面倒くさいことになりそうだぜ…
「まぁ、セレナについては追々考えんぞ。それより今は依頼だ」
「はい！」
「いいか、ビッキー。何もいきなり猫を見つけろ、なんて事は言わねえ。だがな、少なくとも俺に、お前なりの”本気”を見せてみな。そうしたら助手として今後も働かせてやるよ」
俺もビッキーも考えてから動くタイプじゃねえ、動いているうちに答えを見つけるタイプだ。
だから、どんだけ口で説明しても意味はない。
まずは体を動かさせること、それが大切だと思う。
助手として雇う気は無いが、これで悩み解決のきっかけでも掴めりゃいいんだがな。
「流石にやり方も教えねえのは酷だからな。猫探しのコツについては教えといてやる」
「はい、お願いします！」
「いい返事だ。猫も人も基本は同じで、逃げてる相手の気持ちになりきりって、予想する。それだけだ」

◊

「にゃおーん、にゃー、にゃー、にゃ～ん」

響は、翔太郎から教えてもらったやり方で街中を探していた。

時折、通行人から後ろ指をさされたり、写真を撮られそうになったが気にしていない。

それはテストのためでもあるが、依頼人の想いに応えたいというのが、一番の理由だ。

「にゃ～、にゃ～、にゃにゃにゃっ！けほっ、けほっ」

既に太陽は沈みかけており、辺りは薄暗い。

昼過ぎから長いこと探し続けているため、彼女の体は疲れ切っていた。

時には膝をつき、茂みに入った事もあるせいで、服も所々汚れている。

それでも、その目は諦めていない。

真っ直ぐに一直線に、立花響は突き進む。

そんな彼女を、携帯電話を片手に翔太郎は見つめていた。

「あいつ、やっぱ根性あんな」

『響さん、ですからね。翔太郎さん…やっぱり響さんを助手にするのは反対ですか？』

「…仕方ねぇだろ。危険に巻き込むだけじゃねえ。時には、この街の汚いところを見ないといけないのが、この仕事だ。あいつにはそんなもんを見せたく無い。もう二度と…

な」
『それは…そうかも知れませんが…』
「それより、もうリディアンの門限が近い。俺はビッキーを送ってくるから、戸締りして事務所で待ってろ」
翔太郎はまだ、何か言いた気だったセレナを無視して、響の元に向かう。
まだ続けられますと主張する彼女をなだめ、バイクに乗せると2人で走り去る。
こうして猫探しの依頼1日目は終了した。

◊

どこか西洋の城を思わせる建築物の中、広い食事場を思わせる場所で、金髪の女性が椅子に座っていた。
ただ、その身には何も纏ってはいない。

美しく伸びた金髪、張りのある胸、くびれた腰、無駄な肉のない足。
それを惜しげもなく披露する女性には、美しさだけではなく、どこか怪しげな空気すら感じられる。
妖艶、その言葉がまさに適していた。
その側には、紅い服を着た少女が不機嫌そうに佇む。
「おい、フィーネ。本当にアイツを仲間にする気かよ」
少女からフィーネと呼ばれた美女は、少しだけ口角を上げ微笑む。
「ええ、クリス。あの男は随分と頑張ってガイアメモリを売ってくれたみたいでしょう？功績には報いるべきではないかしら」
それを聞いた少女（クリス）は舌打ちをするが、功績という部分については否定しない。
彼女もフィーネの言うことにある程度は納得しているのだろう。
「いっそ、あなたの婿にでもしてみる？きっと尽くしてくれるわよ。それこそ体が灰になるくらいに、ね」
「はぁっ!?じょ、冗談じゃねえぞ！なんであたしがアイツと！」
本気なのか揶揄っているのか。
判断に困る声音に、クリスは赤面しながら大声で反論した。
そんな２人に、扉の開く音が聞こえてくる。

「ははは、相変わらず仲がいい」
笑いながら入ってきたのは、黒髪の男。
その姿は黒いスーツに白いスカーフ。
そして、そのスカーフには一点だけ血が滲んだような模様がある。
それは、以前、翔太郎がウォッチャマンから聞いたガイアメモリの売人の特徴と一致していた。
男は悠然とフィーネの前まで歩いて行くと、その場に傅く。
「あなたにコレが使いこなせるかしら？」
そんな男に対し、フィーネはガイアメモリとWとは違うベルトを差し出す。
メモリの方はどこか強い力を発しており、通常のそれよりも、大きな力を有していることが分かる。
ただのガイアメモリでも、常人であればその毒素で、容易く命を奪う。
それよりも更に大きな力であれば、その代償は計り知れない。
だが、男は怯むことなく、むしろ微笑んですらみせた。
「自慢の婿の誕生ですよ。フィーネ（おかあさん）」
それを聞いたクリスは、金魚のように口をパクパクと開けては閉じる。
一方のフィーネは耐えきれない、というように吹き出してしまった。

男はそれを満足そうに眺め、服を脱ぐ。
露わになる引き締まった体。
鍛え抜かれた胸筋、六分割された腹筋、そしてなにより、美しく引き締まった美尻。
完璧な肉体美がそこにはあった。
その腰に、フィーネ(ガイア)から渡された物(ドライバー)をつけ、メモリのスイッチを押す。
『ナスカ』
クリスの「脱ぐ意味ねーだろ、変態」という言葉を聞きながら、男は腰のドライバーに装填した。
そして、その姿を青いドーパントへと変える。
「ようこそ、須藤霧彦。いえ、雪音霧彦とでも呼びましょうか?」
「おいやめろ!フィーネ!」
「ははは!お好きなように呼んでください。お義母さん」
「お前も笑ってんじゃねぇ!否定しろ!そして、フィーネの事を母とか言うな!」

Cの捜索／新米探偵（仮）

リディアン音楽院の教室。
そこで響は机に顔を伏せがらため息を吐いていた。
「はぁ～、全然見つからないよぅ」
先日受けた猫の捜索依頼。
あれから数日経ったが、未だに手掛かりを掴めていない。
翔太郎から出された課題は”本気”をみせること。
だが、響にはどうすれば本気をみせた事になるのかが、分からなかった。
故に最も正解に近いであろう、猫の発見を目標にしていたが、結果は芳しくない。
学校に行きながら、ノイズの対応と猫の捜索を繰り返しで、疲労も溜まっていた。
（うぅ、こんなんじゃ翔太郎さんに助手として雇ってもらうなんて、夢のまた夢だ。どうにかしないと…）
頭を悩ませていた響の首筋に、冷たい物が触れる。
「うひゃっ」
驚いて顔を上げると、そこにはジュースを片手に持った未来が立っていた。

「疲れてるみたいだったから、これ買ってきたよ。さっきの授業からずっと上の空だったけど、何か考え事？」
「未来！ありがと。…うん、この前言ったとおり、猫探しをしてるんだけど、それが中々見つからなくてね～」
気を利かせてくれた幼馴染に、お礼を言いながら受け取る。
未来には翔太郎から許可をもらい、事情を説明していた。
最も、助手を志願した経緯については、シンフォギアや仮面ライダーなどを除いて、当たり障りの無い程度しか話していないが。
「この街、結構広いからね。聞いた話だと翔太郎さん達もまだ、手掛かりを掴めてないんでしょ？だったら、素人の響が見つけられなくても当然じゃない」
未来の言葉に顔を引きつらせる響。
そう、実は猫探しが得意と聞いていた翔太郎すら、未だ捜索に進展はない。
それ自体は助手を目指す響にとって、猶予が増えるという事でもある。
しかし、同時にこの依頼が難問であるということも意味していた。
依頼人を待たせて続けているというのも心苦しい。
「それはそうなんだけどさ～。でも結構色々なところを探したんだよ？猫の気持ちになって屋根の上とか木の上とか」

両手を丸め猫のモノマネをする響。
未来はそんな彼女に苦笑しながら、席に腰をおろした。
彼女はこの間の件もあり、翔太郎達の仕事が、時に危険をともなう事を知っている。
だから響が、探偵の仕事を手伝うと聞いた時には、不安が大きかった。
無論、翔太郎達が響に危ない事をさせるとは思わない。
それでも幼馴染の性格上、もし困った人がいれば、自分の身を顧みずに首を突っ込んでしまうだろう。
あくまで助手にする、しないは当人同士の問題であるが、未来にはそれが心配だった。
だが、こうして猫探しに頭を悩ませる姿を見ると、少しだけ微笑ましいものもある。
「響はどっちかと言うと犬ぽいからね。上にいないなら下にいたりして」
からかうように言った未来だったが、それを聞いた響は、何かを思いついたように手を叩く。
そして彼女の方に向き直ると、思いっきり抱きついた。
「それだよ未来！さっすが私の幼馴染は頼りになるなぁ！」
「えっ？あの、響!?み、みんな見てるから…」
大喜びする響にに対し、未来は顔を赤らめて照れる。
周囲の目を気にしていたが、クラスメイトは既に「なんだ、いつものことか」と特に

気にしていなかった。

◇

一方、鳴海探偵事務所。
こちらでも捜索に進展が無いことに、焦りを感じていた。
「くそっ、どうなってやがる！こんだけ探してんのに野良猫一匹見つかりやしねぇ！」
「名探偵である翔太郎さんがここまで苦戦するなんて…これは、怪事件の可能性がありますね」
「…こういう時だけ名探偵扱いするなよ」
落ち込む翔太郎に、セレナは舌を出して「冗談です」と告げる。
だが、怪事件というのは強ち間違いではないだろう。
なぜなら、野良猫一匹見つからないというのは比喩表現ではない。
文字通りこの数日間、野外で猫を目撃していないのだ。
それだけでなく、聞き込みの結果、外猫として飼っていた猫が家に戻らなくなったり、ペットショップにいる猫が怯えてたりしている事が判明した。

「今回、響さんにとっては、酷な試練になりましたね」
「…おい、セレナ。お前の言うことも分かるけどよ、今は依頼のことを考えんのが先だろ。少しビッキーに入れ込み過ぎだ」
「それは…ごめんなさい。でも、響さんの頑張りを見ているとつい…」
セレナは注意されても、まだ、響にのことを気にしている。
そんな彼女を見て、翔太郎はため息を吐いた。
この依頼を受けてから、ずっとこの調子だ。
事件に集中しきれていない。
「はぁ…お前がそんな調子じゃ、事件解決までの道のりは遠いぜ。…まぁ、ビッキーがこの依頼に、異常な程やる気出してんのは間違いない」
「やっぱりそう思います?…依頼内容のせい、何でしょうか」
その言葉に翔太郎は以前、調査を思い出した。
響の父親、立花洸。
彼はかつて、一般商社に勤めるごく普通のサラリーマンであり、子煩悩で家庭を大切にする良き父でもあった。
あの事件までは。
あの事件以降、つまりツヴァイウィングのライブ後、生き残った人に向けられた謂れ

なきバッシングは、その家族にも向けられたのだ。
当初は娘の生存を喜んでいた父も、次第に会社での立場を失い、家でも投石などの嫌がらせを受け、完全に参ってしまった。
やがては、酒に溺れ家庭内で暴力をふるうようになり、そのまま姿をくらます。
家に残ったのは娘と母と祖母の3人。
翔太郎達が響と出会ったのはその時だった。
「…父親との思い出、ってとこが引っかかってんだろうな。あいつにとって、幸せな父親の思い出てのは特別だ」
「父親との思い出が特別…」
「だけどな、ビッキーは少なくとも依頼に本気で臨んでやがる。…なぁセレナ、あいつが助手を目指している以上、俺たちが情けねえところ見せられないだろ」
その言葉にセレナは何も言えなかった。
自分でも分かっているのだ、この数日間、精彩を欠いていたのは。
分かってはいたが、それでも考えてしまう。
この依頼、もし自分の予想が正しければ、響はまた、この街の汚い部分を見てしまうのではないかと。
だが、翔太郎の言うとおり、自分達は探偵の先輩として、響に情けないところを見せ

るわけにはいかない。
考えたセレナは、自分が響について悩んでいる理由を話すことにした。
「翔太郎さん、今回の依頼についてなんですが…」

◊

響は放課後のチャイムが鳴ると、すぐに学校を飛び出していた。
（未来ってば流石だな〜。わたしじゃ下（地下）なんて思いつかなかったよ）
今、彼女が目指しているのは河川敷。
正確には、そこから入ることのできる地下水路を目指していた。
響は未来の言った下という言葉を受けて、猫の入ることが出来そうな地下道を、しらみつぶしに回ることにしたのだ。
といってもその数は多く、回りきるにはかなりの時間を有する。
それに、猫が本当にそこにいるという保証もない。
だが、それでも響は友人の言葉に賭けた。
未来にとっては冗談混じりの言葉であったが、それ以外の可能性が思い浮かばなかったのだろう。

そして、それが間違っていなかったことは、彼女が地下を巡り始めて暫く経ってから判明した。

「いたぁ！やっと猫を見つけたよ～。きっと、依頼対象（チャオ）もこの先にいるよね」

そう、響は遂にこの街で野良猫を見つけることに成功したのだ。

まだ、目的の猫を見つけた訳ではないが、今まで外で猫を見つけることすら出来なかった。

その分、今回の期待は大きい。

響はすぐ翔太郎に現在地と猫を見つけた旨のメールを送ると、野良猫の後をつける。

薄暗い道を奥へ進む彼女の耳に、複数の猫の鳴き声が聞こえた。

「あは！やっぱりこの先にいたんだ！」

喜びながら駆け足で音源へと近づく。

そんな彼女を出迎えたのは、暗闇に光る複数の目。

飼い猫、野良猫を問わず大勢の猫がそこにいた。

そして、その中の一匹は、響が懐から出した写真の猫と同じ、特徴的なハートマークの模様、豪華な首輪をしている。

今回の依頼対象であるチャオに間違いないだろう。

「やったぁ！これであの人も喜んでくれるよね！」

今朝までは、テストのためにもと考えていた響だが、いざ依頼対象を目にすると、そんな事よりも人が喜ぶ姿の方が嬉しいようだ。
彼女の頭の中には依頼人の喜ぶ姿だけが浮かんでいた。
だがそんな彼女に突如として、唸り声が聞こえてくる。
驚いて周囲を見回す響の目に映ったのは、人…ではない。
シルエットこそ人に似ているが、全身を覆う短い毛、猫のような足の関節、指先から伸びる鋭い爪と、よく見れば明らかに常人とは違う。
そこから導き出された答えは一つ。
「も、もしかしてこの人、ドーパント!?」
つい最近、彼女はモニター越しに別のドーパントを見たばかりだ。
響がその時見たそれとは、姿形が異なり過ぎて確信は持てない。
だが、装者の勘というものか何となく目の前の異形が、ドーパントであると理解できた。
節々で猫を思わせるドーパントは彼女を睨みつけている。
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
このままでは、襲われるかもしれない。
そう判断した響は、素早くその身にシンフォギアを纏う。

両手を構え、戦いの姿勢を取るが、そこで響はあることに気づきいた。
（何だろう…）の人、怒ってるんじゃなくて苦しんでる？）
変わらず唸り声を上げているが、それに怒りを感じない。
むしろ、どこか苦しげ気で助けを求めているようにすら思えた。
響は一度構えを解くと、ドーパントに向かって話しかける。
「あの、大丈夫ですか？どこか怪我をしてるんですか？」
相手からの返答はない。
響にはそれが、本当に苦しんでるからだと思えた。
少しずつゆっくり、ドーパントを刺激しないように近づく。
もし、本当に怪我をしているなら助けたい。
そう考えての行動だった。
だが、それによりドーパントは却って警戒を強めてしまう。
ドーパントが鋭い爪を長く伸ばし、響へと飛びかかる。
彼女は、それに虚をつかれ咄嗟に拳を握った。
しかし、唇を強く噛み締めると拳を解いて防御の姿勢を取る。
「くっ、うぅぅぅ」
一切反撃をしない響に、容赦のない猛攻が続く。

それを歯を食いしばって必死に耐える響。
シンフォギアを纏っているため、致命傷こそ受けてはいないが、ダメージは確実に蓄積していった。
響の肌が薄っすらと赤みを帯びてくる。
このままでは、もうすぐ彼女の柔肌を、鋭利な爪が切り裂いてしまうだろう。
そう思われた時だった。
『バット』
眩いフラッシュが薄暗かった地下に広がる。
それを受けたドーパントはよろめき、響から距離をとった。
驚く彼女に2人分の足跡と聞き慣れた声が届く。
「おい、ビッキー！一人で突っ走ってんじゃねえよ！」
「…それ、翔太郎さんがいいますか？響さん、お待たせしました！」
駆けつけて来たのは、ドーパント専門家とも言える探偵達。
そんな2人が来たことにより、緊張が解けた響は尻餅をついた。
「あはは…ごめんない。依頼してくれた人の喜ぶ顔を思うと、待ってられなくて」
笑ってはいるが、彼女の顔には疲労が強く浮き出ている。
それを見た翔太郎は頭をかく。

そして、どこか困ったような顔をすると響の前に出た。
「少しは自分の事も考えやがれ。お前に何かあったらヒナもセレナも…俺も心配すんだろ」
そう言う翔太郎の耳は若干赤い。
ハードボイルドを目指す彼は、このようなセリフ、自分には合わないと思っているのだろう。
だが、それでも言わずにはいられなかった。
この少女の献身は、時として度を過ぎるのだ。
「翔太郎さん…」
響を心配する気持ちが十分伝わったのか、彼女の顔も照れで赤くなる。
２人に微妙な空気が流れるが、セレナが咳払いをして流れを変えた。
「あのドーパント、ネコ科のようですね…耳の特徴からするとカラカルでしょうか」
冷静に判断するセレナに、ドーパントが再び苦し気な声を出す。
今度は立っていられなくなったのか、片膝までついてしまった。
そして、周囲にいた猫はそんなドーパントに駆け寄ると、心配そうにその身を舐める。
「なるほど、理解できました。あのドーパントの方、人の姿に戻れなくなったみたいですね。それでこの場所で苦悶していた。その声が、街中の猫の耳に届いて、助けに来る猫

と怯える猫に別れたんです」
「そういうことかよ。どうりで街中で猫を見かけないわけだ。セレナ、助けられるか？」
「はい、問題ありません。どうやら単なるメモリの不具合のようですし、ブレイクさえすれば元に戻せるはずです」
　そう言ってドライバーとメモリを構える2人に、慌てて響が声かけた。
「ま、待って2人とも！今戦ったら、周りの猫ちゃんまで傷ついちゃうよ！」
　響の言う通り、ドーパントの周りは多数の猫がいる。
　その中にはチャオもおり、不用意に戦闘を行うことは危険に思えた。
　それに口にはしていないが、ドーパントに変身している人の身も案じているようだ。
　だが、2人は不敵に笑うと大丈夫だと響に言う。
「心配いらねぇ、一撃で決めてやるよ」
「ええ、周りの猫さんにも怪我は負わせません。私達には”幻想”の力がありますから」
　ポカンとした響をよそに2人は、それぞれのベルトにメモリを装填する。
『ルナ』／『トリガー』
　今回2人が選んだのは、幻想と銃撃手の記憶。
　右半身は黄色、左半分は青色となったWは右手にトリガーマグナムを構えた。
　それを見て、カラカルドーパントはよろよろと立ち上がる。

「そう警戒すんなよ、キャットウーマン。痛みは一瞬だ」
『今、あなたを助けます。ちょっとくすぐったいですけどね』
冗談めかしているように聞こえるが、２人の声音は真剣だ。
ゆっくりとマキシマムスロットに、トリガーメモリを装填する。
『トリガーマキシマムドライブ』
「『トリガーフルバースト』」
トリガーマグナムの銃口から放たれる複数の弾丸。
それに反応して、猫達が宙を舞う。
中には完全に射線を塞いでいる猫もおり、一瞬、惨劇が響の頭をよぎった。
だが、猫に当たる直前に銃弾は曲がる。
それも一度ではない。
猫に当たりそうになる度に、その軌道を変え、ドーパントの元へと向かっていく。
ルナトリガー、その特徴は必中の変則弾。
たとえ、相手が遮蔽物の多い場所に隠れようが、高速移動をしようが関係ない。
この姿のWが、狙った獲物を逃がすことは無いのだから。
「す、すごい…ってあわわ！セーフ！」
Wの放った弾丸により、カラカルドーパントは体外にメモリを排出して、元の女性に

戻った。
響は最初こそ感嘆していたものの、倒れこむ女性を見て、慌てて走って支える。
変身を解いた翔太郎がそれを見て笑う。
「心配なかったろ？…ま、今回はビッキーのお手柄だ。よく頑張ったな」
「完全に響さんに出遅れてしまいました…お恥ずかしい限りです」
２人からの言葉に照れながら頭をかく。
その後、翔太郎が警察に連絡をして、女性を引き渡すと事務所へと戻った。

◇

翌日、事務所には響、セレナ、翔太郎に加え依頼人の中条がいた。
響によって無事保護された猫を、引き渡すためである。
「お待たせしました！確認をお願いします！」
響はニコニコと笑いながら猫をケージから出す。
それを見た中条は一瞬喜んだ後、すぐに焦った様子に変わった。
じろじろと猫の姿を見回している。
「ひょ、ひょっとしてこの子、チャオじゃなかったりします？」

先程までの笑顔が一転、不安な顔になる響だが、翔太郎がそれを否定した。
「いや、この子はチャオで間違いない。…ですよね？中条さん」
「ええ…それは…そうなんですけど…あの、この子は最初からこの状態で？」
猫を見つけたというのに、依頼人の表情は暗い。
自体がまったく飲み込めていない響は、頭に疑問符が浮かぶ。
そんか彼女を見て、セレナは一瞬辛そうな顔をするが、すぐに口を引き締め中条に言い放った。
「マリーナエメラルド…それが答えですよね？」
マリーナエメラルド、その言葉を聞いた中条の顔が強張る。
「やっぱり、そうなんですね。中条さん…あなたが探していたのはチャオじゃなくて、首輪の方だった」
「な、何をおっしゃられてるのか…私は、ただ父との思い出を…」
「…私は捜査初日、翔太郎さん達に置いていかれて手持ち無沙汰だったので、あなた達家族について調べさせてもらいました。少しでも猫探しの手掛かりになれば、と」
翔太郎は、帽子で目元を隠しながら「まだ根に持ってやがる」と呟く。
そうやって、戯けなければ耐えられない。
響には彼の態度がそう言っているように感じた。

「残念ながら、あなた方の事を調べても、チャオについての有力な情報はありませんでした。ただ、一つ…あなたがチャオの飼い主であり、実の父親である中条巌さんが不仲であった事以外」

「今日、俺はこいつに言われてあんた達の家族について、より詳しく調べさせてもらった。残念だが、あんた達が巌さんと良い思い出だった、なんて言えるような話は一つとして聞けなかったぜ。巌さんの生前から財産分与の話で揉める一族、それを怒鳴りつける巌さん…今際の際に寄り添ってたのは、チャオだけだったらしいな」

「あなた方の動向をまとめると、父親の死後、最も高価な遺産がチャオの首輪についている事が判明した。しかし、一家は誰もチャオを気に留めていなかったため、居なくなったことに気づかなかったんですね。だから、私達を頼った…」

「焦ったあんたら一家は、それぞれが独占しようと動いてたわけだ。おかげですぐに情報が集まったがな」

セレナは、その能力によっていち早くこの事に気づきかけていたのだ。

そして、翔太郎に相談し、捜査してもらった事で確信を持った。

今回の件は、依頼人を信じていた響にとって、酷な現実である事を。

中条の体が震える。

だが、それは悲しみからではない。

図星をつかれたことによる焦りからだった。
「し、仕方ないでしょう…18億よ！父の遺産の中では最も高額なの！そんなのどんな手を使っても欲しがるに決まってるじゃない！」
その言葉に響はうつむく。
その表情は2人からはうかがえないが、少なくとも彼女が、傷ついている事だけは分かった。
しかし、中条はそれに構う事なく続ける。
「そもそも、そんな物をたかが猫の首輪に使ってるなんて、分かるわけ無いわ！」
「これは推測ですが…チャオの目はこの宝石によく似ています。きっと似合うから、それだけだったんでしょうね」
「正気じゃない…正気じゃないわ！父は、この宝石の価値を理解していなかったのかしら！なんて、馬鹿なの！」
ドン、と誰かが机を叩いた。
それに驚き中条は口をつぐみ、その人物を見る。
その視線の先にいたのは、先程まで沈黙を保っていた響。
彼女は、その目に溢れんばかりの涙を溜めて叫ぶ。
「本当に…本当に分かりませんか!?お父さんは、お金なんてどうでも良かったんですよ

！ただ大変な時に、側に居て欲しかった…それをしてくれたのがチャオだけだった！だからこの子に贈ったんです！」

その勢いに気圧され、中条は言葉を失う。

翔太郎もセレナも、思いの丈をぶつける響を黙って見ていた。

「家族って辛い時、苦しい時に側に居てくれるものでしょう!?大変な時に、寄り添ってあげるものでしょう!?お父さんは…それをして欲しかっただけ、なんですよっ！」

ポロポロと大粒の涙が彼女の頬を伝う。

翔太郎はそんな彼女に、そっと帽子を被せて立ち上がった。

「中条さん、今回の依頼料はいらねぇ。首輪もあんたらに返す、相続争いでも何でも好きにしな。だが、チャオだけは渡せねぇ。こいつは中条巌さんの忘れ形見だ。あんたらには託せない」

帽子は響に預けた事で露わになった翔太郎の目許。

そこには中条に対する冷たさと、響を思う優しさがあった。

それに気圧された中条は、慌てて首輪を受け取ると、脱兎の如く事務所から逃げ出す。

「暫く、それ被ってろ。半熟のお前にはまだ早いが仕方ねぇ。今日だけ特別だ」

「すぐ、鳴海荘吉さんの言葉を真似するんですから…響さん、少し私と一緒に休みましょう？」

そんな2人の言葉に黙った頷く響。
帽子の下からは、未だ雨が降り続けていた。

◇

「あはは…すみません。翔太郎さん、セレナちゃん、勝手なことして依頼人さんに怒鳴ったりして」
そう言う響の目元はまだ赤い。
セレナはそんな彼女を痛々しそうに見ている。
翔太郎が以前言ったこの街の汚い部分、その一端がまさに響を襲った。
探偵という仕事は綺麗事ばかりではない。
もし、今後も探偵を続けるのであれば、再び、今回のような事になる時もあるだろう。
彼女は、その度に響を傷つけるよりは、助手を諦めさせた方がいいのではないか、と思った。
「ビッキー、一つだけ言っておくぜ。今後、俺が認めるまで仕事中に帽子は被るな。そい

つは、一人前の証だ。お前にはまだはえーよ」
　翔太郎の言葉を理解できずに、首をかしげる響。
　彼はそんな彼女に嘆息すると、ゆっくりと告げた。
「キャットウーマンの件で、お前が探偵稼業の必需品を持ってるのは分かった。だが俺達は、今回みたいに汚い依頼を受けることもある。それでも、結果的に誰かを救えるのなら、依頼をやり遂げなきゃなんねえ。お前がチャオを救ったみたいにな」
　そこまで言って翔太郎は、彼女の頭から帽子を取り、自分の頭に被り直す。
「お前がやった事は間違ってねえ。先代…俺のおやっさんもそう言うだろうよ。だから、半分くらいは認めてやる。残り半分は助手として学んでいけ、お前が知りたい覚悟ってやつと一緒に」
　そんな彼の言葉に、響より先にセレナが反応した。
「ちょ、ちょっと本気ですか翔太郎さん?」
「あぁ、最初から汚いところを見せちまったんだ。だったら覚悟決めて、最後まで面倒見てやんのが責任だろ。この街にいるのは、醜い奴らだけじゃ無いってのを教えてやんねえとな」
　セレナは頭を抱えて悩む。
　たしかに、彼の言う事も一理ある。

だが、数日前まで絶対に助手にはしないと言っていた翔太郎が、手のひらを返したのが納得いかなかった。

いや、でも、とぶつぶつと呟くセレナを横目に、響がおずおずと口を開く。

「で、でもいいんですか？わたし、全然ダメダメで…」

「二度言わせるなよ。お前はダメダメなんかじゃねえ、ドーパントだろうが、猫だろうが他人の事を選べる優しい奴だ。…その心で、俺と一緒に街の涙を拭おうぜ」

その言葉は彼女の心に温かく溶け込んだ。

シンフォギアの力に目覚めた日から、響にとっては辛い戦いの連続でだった。

その度に自分の弱さを思い知り、涙しそうになった時もある。

だが、そんな自分の事を認めてくれる人がちゃんといたのだ。

そう思うと自然と笑顔になれた。

「は、はいっ！よろしくお願いします！」

「それなら、今日は響さんのお祝いしないといけませんね！未来さんも呼んで、ご飯でも食べに行きましょう」

「あん？セレナは反対なんだろ、じゃあ来なくていいじゃねえか」

「あー！どうしてすぐ、そういう意地悪を言うんですか！元々反対してたのは翔太郎さんのくせに！」

「まぁまぁ、落ち着いてセレナちゃん。わたしちゃんと分かってるから、セレナちゃんが心配してくれたってこと。美味しいお好み焼きのお店があるから、そこで一緒に食べよう？」
「うぅぅぅ…はい」
ほんの数分前までは、暗い雰囲気のあった事務所が今では嘘のようだ。
それはやはり、彼女が笑っているからだろう。
立花響、彼女の笑顔は人を温かくさせる。

◊

その後のチャオだが、優しい人に引き取られる事になった。
その人の名は蝶野真由、なんとあのキャットウーマンの正体だ。
彼女は結婚詐欺師に騙され、自暴自棄になってメモリに手を出したらしい。
だが、そのメモリが不調であったため、蝶野さんは地下で一人苦しむ事になった。
その影響なのか自分がドーパントになった時のことは、ほとんど覚えていないよう

だ。
それでも、苦しむ自分に寄り添った相手は何となくわかるらしい。
チャオを見せると涙ながらに、引き取りたいと言ってくれた。
悪事にこそ手を染めていないが、彼女の心の傷は大きい、それをチャオが癒してくれる事を願う。
まぁ、そんな心配も必要ない…か、仲睦まじく戯れていたし。
ビッキーはそんな1人と一匹を遠目に見ながら、幸せそうに笑っていた。
あいつにとっての一番の報酬はあの笑顔なのかもな。
「また変なのを作って…今回、報告書っているんですか?」
「つくらねーと落ち着かないんだよ。…なぁ、それより今回のガイアメモリの売人、また別のやつだったな」
「ええ、粗悪品と知って売りつけたのだとしたら厄介、ですね。またメモリが不調を起こす可能性があります。早く見つけないといけませんね」

◊

薄暗い路地を慌てて駆け抜けるスーツの男。
時折、振り返るがそこには誰もいない。
男はある程度、走ったところで、物陰に隠れた。
「はぁっ…はぁ…こ、ここまで来れば逃げ切れるだろ」
「やぁ、そんなに慌ててどこに行くのかな?」
その言葉は、上空から聞こえてくる。
驚いた男が顔を上げると、そこには青い姿の異形が立っていた。
「不良品を押し付けたというのに、アフターサービスも無い。そんな君にはお仕置きが必要だろう?このガイアメモリは、人類がノイズに対抗できるよう進化する為に、必要な万能の小箱。軽々しく扱っていいものでは無い」
「ひっ、や、やめ!くるな…くるなぁぁぁぁ」

「おい、変態。どこ行ってたんだよ?」

「なに、少し街のゴミ掃除をね」
「ゴミ掃除だぁ？」
「あぁ、もうあのゴミがこの街を歩くことはない。…それよりクリスちゃん、美味しいお店があるんだがこの後、どうかな？ふらわーといってお好み焼きの店なんだが」
「一人で行ってろよ変態」

暗躍する街の闇。
会合の時は近い。